JAPAN COMMUNICATION ASSOCIATION
THE 48th ANNUAL CONVENTION

日本コミュニケーション学会 第48回 年次大会

コミュニケーションとコミュニティ

2018.6/9[土]▶10[日]

札幌医学技術福祉歯科専門学校

Japan Communication Association

日本コミュニケーション学会

第 48 回年次大会

コミュニケーションとコミュニティ

Communication and Community

札幌医学技術福祉歯科専門学校（北海道札幌市中央区）

2018年6月9日（土）～ 6月10日（日）

June 9—10 2018

Sapporo Medial Technology, Welfare, and Dentistry Professional Training College

[大会参加者へのご案内]

1. 受付は、札幌医学技術福祉歯科専門学校 3 階にあります。発表会場は同じ階ですが、それぞれの発表会場へ入る前に、必ず受付にお立ち寄りください。
2. 大会参加費は、2 日間で会員 4,000 円(当日払いは 4,500 円)、非会員の方は 5,000 円です。参加ご希望の方は(会員･非会員同様に)、学会ホームページを通じて、6 月 1 日(金)までにお申し込み下さい。年次大会へは JCA 学会ホームページより、オンラインでお申込みください。
3. 昼食に関しては、今大会では販売しません。会場校付近には多数の店舗が営業していますのでそちらをご利用ください。
4. 懇親会の参加費用は 5,000 円です。当日参加も可能ですが（若干名）、予約の関係上できるだけ大会参加の申し込みの際に合わせて申込みください。懇親会申込みは、大会参加申込み同様に、学会ホームページからお願いします。懇親会会場は北海道ならではの居酒屋で開催されます。ふるってご参加ください。
5. 年次大会の受付周辺にて、書籍販売を行っています。また、飲み物等の用意が参加者控室にございますのでご利用ください。
6. 会場内は禁煙です。所定の喫煙所をご利用ください。

[発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、操作等の確認を予めお願いいたします。プロジェクター、及びスクリーンは発表教室の全てに設置されております。今回の大会会場にはPC及びケーブルは備え付けられておりませんので、パソコンならびにRGBケーブル（１メートル程度）をご持参ください。Macの利用者で、Macを持参されたい方は、ケーブルもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて 30 分です。時間厳守でお願いします。
3. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの 3 つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 発表開始 10 分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

[理事の方へ]

1. 大会前日の 6 月 8 日（金）に、札幌医学技術福祉歯科専門学校 2 階コミュニティルームにて、理事会が開催されます。時間は 14：00〜17：00 です。ご参集よろしくお願い申し上げます。

事前問合せ先：
会場校担当（大会実行委員長） 長谷川　聡
〒061-0293　北海道石狩郡当別町金沢 1757
北海道医療大学 E-mail: hasepy55@gmail.com
発表・論文について：
学術局　高井　次郎　E-mail: jtakai@cc.nagoya-u.ac.jp
事前問合せ(参加費等について) 及び当日問合せ先：
事務局　高永　茂　E-mail: takanaga@hiroshima-u.ac.jp

[Information for Participants]

1. Please register at the registration desk upon your arrival, located in the third floor at Sapporo Medial Technology, Welfare, and Dentistry Professional Training College.
2. The conference fee for two days is ¥4,000 (¥4,500 at the door) for members and ¥5,000 for non-members. Please pay through the on-line registration by June 1 or at the reception desk during the conference.
3. As for lunch, there are convenience stores and restaurants in neighborhood, so this conference will not deal with the order of lunch boxes.
4. The convention dinner will be held at a Japanese Izakaya restaurant near the conference site. The fee is ¥5,000, payable only in advance by the on-line registration, or at the conference desk on a first-come-first served basis (limited to a few people).
5. Books are to be on sale and some refreshments are available near the reception desk.
6. Smoking is strictly prohibited on and around the building.

[To Presenters]

1. All rooms are equipped with projectors and screens. Please bring your own computer and RGB cable. If you are a Mac user, please bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

[To JCA Officers]

1. JCA officers ***meeting will be*** held at 14:00 through 17:00 on Friday, June 8, at Sapporo Medial Technology, Welfare, and Dentistry Professional Training College.

.

General Inquiry:

Satoshi Hasegawa (Program Chair)
Health Sciences University of Hokkaido, 1757 Kanazawa Tobetsu-cho,
Ishikari-gun, Hokkaido061-0293 E-mail: hasepy55@gmail.com

Inquiry about presentation/papers before the convention:

Director of Academic Affairs (Conference Planning) Jro Takai
E-mail: jtakai@cc.nagoya-u.ac.jp

Inquiry about fees before the convention and any inquiry during the convention:

Executive Secretary Shigeru Takanaga E-mail: takanaga@hiroshima-u.ac.jp

スケジュール

第1日　6月9日（土）

	A 会場 （小講堂 1）	B 会場（DH3 年教室）	C 会場 （DH2 年教室）
セッション 1 10:00−11:30	パネル企画（政治参加） 松島		
支 部 会・昼 食 11:40−12:30	北海道（小講堂 1），東 北（小講堂 1），関 東（小講堂 1），中 部（小講堂 1）， 関 西（DH3 年教室），中国四国（DH3 年教室），九 州（DH2 年教室）		
セッション 2 12:30 (13:00)−14:00	異文化 守﨑	組織・対人 野中	パネル企画（レトリック） 是澤
14:10−15:00	**会場：小講堂 1** 総　会　　司 会：　高永 茂 挨拶：五島 幸一(JCA 会長)		
15:10−17:50	**会場：小講堂 1** 学術講演　　向谷地 生良（北海道医療大学/浦河べてるの家）&その仲間たち 司会：高井 次郎（JCA 学術局長 、名古屋大学）		
18:30―	懇 親 会　　居酒屋 瑠玖＆魚平 （司会：大会実行委員長）		

第2日　6月10日（日）

	A 会場 （小講堂 1）	B 会場（DH3 年教室）	C 会場 （DH2 年教室）
セッション 3 9:30 (10:00)−11:00	コミュニケーション教育研究会 共催 パネル 五十嵐	政治 守﨑	レトリック 青沼
セッション 4 11:10−12:40	学術局セッション 森泉	特別企画パネル 吉武	

Schedule

Day 1　Saturday, June 9

	Room A （Small Hall 1）	Room B （DH3 Classroom）	Room C （DH2 Classroom）
Session 1 10:00–11:30	Panel (Political practice) Matsushima		
Chapter meeting & Lunch 11:40–12:30	Hokkaido (Small Hall 1), Tohoku (Small Hall 1),　Kanto (Small Hall 1),　Chubu (Small Hall 1),　Kansai (DH3Classroom),　Chugoku-Shikoku (DH3Classroom),　Kyushu (DH2Classroom)		
Session 2 12:30 (13:00)–14:00	Intercultural Communication Morisaki	Organizational and Interpersonal Communication Nonaka	Panel （Rhetoric） Koresawa
14:10–15:00	**Room：Small Hall 1** General Assembly	MC：　Shigeru Takanaga	Koichi Goshima (President of JCA)
15:10–17:50	**Room：Small Hall 1** Keynote Address	Ikuyoshi Mukaiyachi （Health Sciences University of Hokkaido / Urakawa Bethel House） & his comrades MC：Jiro Takai （Director of Academic Services, Nagoya University）	
18:30–	Conference Dinner	Izakaya　Rukku & Uohei （MC：　Satoshi Hasegawa）	

Day 2　Sunday,　June 10

	Room A （Small Hall 1）	Room B （DH3 Classroom）	Room C （DH2 Classroom）
Session 3 9:30 (10:00)–11:00	Division of Communication Education Panel Igarashi	Political Communication Morisaki	Rhetorical Communication Aonuma
Session 4 11:10–12:40	Academic Services Panel Moriizumi	Special Panel Yoshitake	

学　術　講　演　Keynote Address

幻聴さん、いらっしゃい！
ー私の観る世界・生きる世界ー

向谷地　生良
北海道医療大学看護福祉学部教授／浦河べてるの家
&
その仲間たち

北海道の中心都市札幌から 180 キロ南東に下ると太平洋に面した浦河町（人口 12,500 人）がある。日高昆布と競走馬の故郷として知られた浦河町の一角に「浦河べてるの家（以下べてる）」がある。べてるは、今から 40 年ほど前（1978 年）浦河赤十字病院精神科に入通院の経験のある若者達（統合失調症や依存症など）の自助活動をベースに、助け合いながら起業による地域貢献を旗印に、街の古い教会堂（浦河教会）を拠点に 1984 年に発足した地域活動拠点である。

べてるは、「過疎も捨てたもんじゃない」「三度の飯よりミーティング」などを理念としてかかえ、「地域のかかえる苦労への参加」の手段としてビジネス一起業に挑戦、過疎化が進み事業所の撤退や閉店する店が相次ぐ中で日高昆布の産直・出版事業や会社を設立して介護保険事業に進出。2001 年には、当事者研究を創案して自助活動に取り入れ、翌年には、社会福祉法人を設立、統合失調症を持つメンバーが理事長、施設長に就任し、就労支援、居住支援に取り組んでいる。現在は、さまざまな障害を持つ 100 名以上の当事者が事業に参加、現在は、海外も含めて、年間、延べ 1000 人を越える視察者、研修の受け入れをしている。

このべてるの“当事者文化”から生まれたのが、毎年開催される「べてる祭りの」の恒例行事“幻覚＆妄想大会”である。これは一年間を振り返り、もっとも感動的で、印象的な幻覚、妄想体験をした仲間を表彰する取り組みである。べてるの日常には、実にユニークな会話が飛び交う。「今日の幻聴さん、元気！」、「幻聴さんは、人間関係と同じだから、けんかしちゃダメ！」と言うように、べてるでは、「幻聴さん」や「妄想さん」も、れっきとした一人の“人格的存在”として扱われ、コミュニケーションの対象なのである。

【経歴】

向谷地　生良（むかいやち・いくよし）　Ikuyoshi Mukaiyachi
北海道医療大学教授／浦河べてるの家ソーシャルワーカー

1955 年、青森県生まれ。1974 年に北星学園大学社会福祉学科入学。特養ホームに住み込んだり、難病患者や脳性麻痺の障害をもった当事者たちとかかわる。卒業後、浦河赤十字病院でソーシャルワーカーとして勤務。当事者と教会の一室に住み込み、1984 年に彼らとともに「べてるの家」を設立。現在は北海道医療大学教授も兼務。

主な著書に、『技法以前』（シリーズ ケアをひらく、医学書院）、『安心して絶望できる人生』（NHK 出版、共著）、『統合失調症を持つ人への援助論』（金剛出版）、『べてるな人びと第 1-3 集』（一麦出版社）などがある。

今回の学術講演は一般公開され、会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（事前予約不要）。

＜パネル＞

コミュニケーション教育研究会共催

ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る　第 2 弾

司会・パネリスト：五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）
パネリスト：池田　理知子（福岡女学院大学）
石橋　嘉一　（青森中央学院大学）
塙　幸枝　　（神田外語大学）

JCA 年次大会において、コミュニケーション科目がどのようなコンテンツを扱い、どのような問いかけや方法で教えられているかについて情報・意見交換をする機会は定期的に提供されてこなかった。コミュニケーション学プロパー間の意見交換はこれからのコミュニケーション教育のために必要であることはもちろんであるが、そうではない一般大会参加者に授業実践におけるヒントを提供する機会を持つことは、JCA の社会的使命としても重要であろう。特に、医療・福祉系の大学においてコミュニケーション教育はますます重要視されているが、患者や利用者との円滑なコミュニケーションをはかるためのスキル習得に留まる傾向は依然として強い。しかし、様々な個別の背景を抱えた患者や利用者の支援には、多くの誤解や葛藤なども含めて目を向けていかねばならない現実もあり、スキルの習得に限界を感じて始めている医療・福祉分野の実践者も少なくない。

ヘルスコミュニケーションをコミュニケーション教育の中で扱うということは、医療・福祉分野を目指す学生教育にとどまらない。人が生涯を通して向き合わなければならないヘルス（健康）をテーマにコミュニケーションを考えることは、人を理解し、我々が生きる社会について考えることになる。ヘルスコミュニケーションを学ぶことは、日常を見直し、社会の変化とともにあるコミュニケーションを学ぶことに他ならない。

本パネルは、2016 年の JCA 第 47 回年次大会における「ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る」の第 2 弾として開催するものである。『よくわかるヘルスコミュニケーション』（ミネルヴァ書房, 2016）の編集・執筆に携わり、さらに授業でこの本をテキストとして使用した 4 人がパネリストとして話題提供をし、参加者とともにヘルスコミュニケーションをコミュニケーション教育として扱う意義と可能性をさらに探っていく。

学術局セッション

コミュニケーション研究者とコミュニティ
—支部長からの提言—

コーディネイター・司会：森泉　哲　（南山大学）
話題提供者：長谷川　聡　（北海道支部支部長・北海道医療大学）
川内　規会　（東北支部支部長・青森県立保健大学）
小西　卓三　（関東支部支部長・昭和女子大学）
守崎　誠一　（関西支部支部長・関西大学）
脇　忠幸　（中国・四国支部支部長・福山大学）
池田 理知子　（九州支部支部長・福岡女学院大学）
レスポンデント：高井　次郎　（名古屋大学）

本年度の年次大会のテーマである「コミュニケーションとコミュニティ」にちなみ、日本コミュニケーション学会の地域レベルでの研究者コミュニティに日ごろ尽力をされている支部長の先生方から、コミュニティ実践について意見交換するセッションを企画した。

コミュニケーション研究は、学際的領域であるためにテーマや手法が異なる研究とは親和性が希薄であるという課題が存在する一方、「コミュニケーション」という枠組みで分野を横断し、共通のアイデンティティや研究領域を創出することのできる超領域性を兼ね備えた分野でもある。昨今の学問的潮流においても、簡単に解決できないような複雑な課題に対して、ディシプリンでまとまるのではなく、様々な研究分野の研究者が集まり共同研究を遂行し解決の糸口をつかもうとする研究も盛んに行われている。

このような流れの中、本セッションにおいて、まず各支部での数年間の活動を報告していただくことを通して、支部というコミュニティとどうかかわってこられたのか、また学会内外のコミュニティとどのように関わってこられたのかについてを中心にご自身の経験を語り合っていただく。次に、今後日本コミュケーション学会としてどのようなコミュニティを創出していけるのか、また他学会・研究領域・社会という様々なコミュニティと新たにどのように関係構築していけるのかについてヴィジョンを語っていただくことを通して、日本コミュニケーション学会という研究者コミュニティのあり方について意見交換を行う。本セッションを通して、本学会の今後更なる発展の足がかりになるような議論ができればと考える。

特別企画　パネル

オーラル・ヒストリーからコミュニケーション研究へ II —石井敏氏による異文化コミュニケーション研究の批判的継承—

パネリスト・司会：　吉武　正樹　（福岡教育大学）
パネリスト：　石黒　武人　（武蔵野大学）
原　和也　（明海大学）
師岡　淳也　（立教大学）

本企画パネルは、昨年の第 47 回年次大会で行った「オーラル・ヒストリーからコミュニケーション研究へ—異文化コミュニケーション研究の場合—」に続く企画である。これら一連の企画は、特に日本のコミュニケーション研究の歴史や当時の文脈を振り返り、再解釈しつつ、批判的に継承することで学術的に価値づける包括的プロジェクトである。第一回パネルでは異文化コミュニケーション研究に焦点を当て、主に、異文化コミュニケーション研究と世界的な学問全体の潮流との関係、学・領域のアイデンティティや統一性という「求心的側面」と多様性・雑多性・越境性という「遠心的側面」の関係について協議した。

そもそも何かを名付けたり同定したりすることは排他性や暴力を免れないとは、コミュニケーションの動態性という原理である。本領域の名称および特性がそもそも「他者との遭遇」を契機としているが、日本の異文化コミュニケーション研究において「他者」の座にあったのは、主として「アメリカ」や「ヨーロッパ」であった。ここで、異文化コミュニケーション研究に空いた大きな「穴」に気づく。一つは、「日本」や「アジア」の視点が欠けている点、もう一つは、研究では理性が求められるがゆえに、超自然的なことや精神世界など「合理的」とは考えられていない現象をほとんど対象にしてこなかったことだ。ここに一連の企画の次へのステップがある。

本パネルでは、日本的コミュニケーション、仏教、西洋的物質文化批判、人間と超自然の異文化コミュニケーションなど、研究の射程が身近でありつつも広範囲、かつ深い、石井敏氏の功績を取り上げたい。石井氏の研究は、先に記した「穴」ゆえに十分かつ正確に評価されてきたとは言い難い。日本におけるコミュニケーション研究・学会の創始者のお一人であり、常に批判的精神を忘れず、通時的・共時的な研究に余念がなかった石井氏の研究こそ、本企画に大きな示唆を与えてくれることだろう。

6 月 9 日（土）　Saturday, June 9　11:40-12:30 @ A, B, C 会場：　Room A, B, & C

支部会議　　Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6 月 9 日（土）　Saturday, June 9　14:10-15:00 @ホール：小講堂

総　会　General Assembly

司　会：　　高永　茂

開会の辞：　五島　幸一　　（愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会　会長）

6 月 9 日（土）　Saturday, June 9　18:30-@居酒屋瑠玖＆魚平: Izakaya Rukku & Uohei

懇親会　Conference Dinner　：居酒屋　瑠玖＆魚平 Izakaya Rukku & Uohei

司会：　　長谷川　聡（北海道医療大学　大会実行委員会委員長）
多くの皆様と交流を図りたいと思います。懇親会は 18:30 に開始。大会会場より徒歩数分です。懇親会場までご案内いたします。皆さまのご参加をお待ちしております。

会費 5000 円、大会申込みの際、同時に申込み下さい。
＊当日申し込みは、9 日午前中までに（先着若干名程度）。

書籍・教育機材の展示

大会会場の休憩スペース(受付周辺)にて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。
A variety of educational materials are to be displayed beside the reception desk.

◆　宿泊のご案内
本年次大会の会場が北海道のため、宿泊の予約がしづらいことが予想されます。各自で早めに予約してください。

◆　昼食のご案内
大会会場施設周辺にレストラン・コンビニエンスストアなどの施設が多くありますので、そちらをご利用ください。今回は弁当の注文は斡旋しておりません。

<Memo>

6 月 9 日（土） Saturday, June 9

受付　9:30～　Registration commencing at 9:30

時間	会場	プログラム　Session
10:00 | 11:30	小講堂 1	**＜セッション　1＞** **パネル**　Panel Discussion コミュニケーション研究と（しての）「コッカイオンドク !」 司会・登壇者：松島　綾　（立命館大学） 登壇者：池田　理知子（福岡女学院大学） 宮脇　かおり（立命館大学） 田島　慎朗　（神田外語大学） 長谷川　聡　（北海道医療大学） 是澤　克哉　（広島修道大学） 師岡　淳也　（立教大学） 福本　明子　（愛知淑徳大学） 小山　哲春　（京都ノートルダム女子大学） 青沼　智　（津田塾大学）
11:40 | 12:30	小講堂 1 小講堂 1 小講堂 1 小講堂 1 DH3 年教室 DH3 年教室 DH2 年教室	**支部会議**　Regional Chapter Meetings 北海道支部　Hokkaido 東北支部　Tohoku 関東支部　Kanto 中部支部　Chubu 関西支部　Kansai 中国四国支部　Chugoku & Shikoku 九州支部　Kyushu
13:00 | 14:00	A 会場 (小講堂 1)	**＜セッション　2＞** **異文化**　Intercultural Communication 司会：坂井　二郎（東京福祉大学） 1. ユーモアの発話における日台の比較 黄英哲（台中科技大学） 2. 日本で就職する留学生の戸惑いと適応 守崎　誠一（関西大学） 内藤　伊都子（東京福祉大学）
13:00 | 14:00	B 会場 (DH3 年教室)	**組織・対人**　Organizational and Interpersonal Communication 司会：野中　アンディ（株式会社コムスキル） 1. 「婚活支援」における男女関係の発展に関する研究 −男女関係における社会交換理論の適用について− 佐々木　研一（株式会社イノベーションゲート） 宮原　哲（西南学院大学） 2. 日本版コミュニケーション・オーディット指標開発 山口　生史（明治大学） 山口　麻衣（ルーテル学院大学）

12:30 | 14:00	C 会場 (DH2 年教室)	パネル　　Panel Discussion 歴史研究とレトリック研究の交錯点を探る―『狂気の歴史』を読む― 司会：柿田秀樹（獨協大学） 発表者：是澤　克哉（広島修道大学） 松島　綾　（立命館大学） 宮脇かおり（立命館大学） レスポンデント：北本　晃治（帝塚山大学） 中西満貴典（岐阜市立女子短期大学）
14:10 | 15:00	小講堂 1	総会　　General Assembly 司会：　高永　茂　（広島大学） 開会の辞：五島　幸一　（愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会　会長）
15:10 | 17:50	小講堂 1	学術講演　　Keynote Address 「幻聴さん、いらっしゃい！ー私の観る世界・生きる世界ー」 向谷地　生良　（北海道医療大学教授/浦河べてるの家） 司会：高井　次郎（JCA 学術局長、名古屋大学）
18:30 |	居酒屋 瑠玖＆魚平	懇親会　　居酒屋　瑠玖＆魚平　　Conference Dinner 北海道料理を楽しみながら、交流を深めましょう。(会費　¥5,000) 当日の申し込みも可能です（先着若干名）。懇親会場は、近隣の居酒屋です。

6 月 10 日（日） Sunday, June 10

受付　9:00～　Registration commencing at 9:00

時間	教室	プログラム Session
9:30 ｜ 11:00	A 会場 (小講堂)	＜セッション ３＞ **パネル　コミュニケーション教育研究会共催　Division of Communication Education** ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る　第 2 弾 司会・パネリスト：五十嵐紀子（新潟医療福祉大学） パネリスト：池田理知子（福岡女学院大学） 石橋 嘉一（青森中央学院大学） 塙　幸枝　（神田外語大学）
9:30 ｜ 11:00	B 会場 (DH3 年教室)	**政治　Political Communication** 司会：守﨑　誠一（関西大学） 1. 北朝鮮と対話―政治外交に見る対話の意味と対話言説の特徴― 小坂　貴志（神田外語大学） 2. Civil(ity)概念を再訪する－日本の政治コミュニケーションのために－ 田島　慎朗（神田外語大学） 3. 自由とコミュニケーションについての一考察 平野　順也（熊本大学）
10:00 ｜ 11:00	C 会場 (DH2 年教室)	**レトリック　Rhetorical Communication** 司会：青沼　智（津田塾大学） 1. グッドナイトの論争分析の一般化に関する一考察 ―遺伝子組換え作物に関する論争を発端として― 山本輝太郎　（明治大学） 2. Vulnerability in Resistance: - A Japanese (Former) Hostage’s Body as Irony - Naoki Kambe (Rikkyo University)
11:10 ｜ 12:40	A 会場 (小講堂)	＜セッション ４＞ **学術局セッション　Academic Services Session** コミュニケーション研究者とコミュニティ―支部長からの提言― 司会：森泉　哲　（南山大学） 登壇者：長谷川　聡　（北海道支部支部長・北海道医療大学） 川内　規会　（東北支部支部長・青森県立保健大学） 小西 卓三　（関東支部支部長・昭和女子大学） 守崎　誠一　（関西支部支部長・関西大学） 脇　忠幸　（中国・四国支部長・福山大学） 池田 理知子　（九州支部支部長・福岡女学院大学） レスポンデント：高井　次郎　（名古屋大学）

11:10 ｜ 12:40	B 会場 (DH3 年教室)	**特別企画パネル** Special Panel Discussion オーラル・ヒストリーからコミュニケーション研究へ II ―石井敏氏による異文化コミュニケーション研究の批判的継承― パネリスト・司会： 吉武　正樹　（福岡教育大学） パネリスト： 石黒　武人　（武蔵野大学） 原　和也　（明海大学） 師岡　淳也　（立教大学）

発表要旨

6 月 9 日（土）　Saturday, June 9　10:00-11:30　Session 1

A 会場（小講堂）	**パネル**
Room A	**Panel Discussion**

コミュニケーション研究と（しての）「コッカイオンドク！」

司会・パネリスト：松島　綾（立命館大学）
パネリスト：池田　理知子（福岡女学院大学）宮脇　かおり（立命館大学）
田島　慎朗（神田外語大学）長谷川　聡（北海道医療大学）
是澤　克哉（広島修道大学）師岡　淳也（立教大学）福本　明子（愛知淑徳大学）
小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）青沼　智（津田塾大学）

反原発・脱原発デモや反特定機密法・反安保法案の集会など、「国会前」が市民によるコミュニケーションの場として定着して久しい。首相官邸や議員会館、国会図書館周辺の街頭、また憲政会館横の国会前庭では、大抵、誰かが立ち、思い思いの方法で声をあげている。一方、衆議院、参議院といった国会「内」の議場におけるコミュニケーション（国会審議）も、最近、マスコミ等でにわかに脚光を浴びている。本パネルは、そういった国会審議のやり取りを、コミュニケーション研究の立場から考察する。

具体的には、全国各地で行われている「コッカイオンドク！」(https://believe-j.jimdo.com/）というコミュニケーション実践を研究者自身が行い、加えてそれに対する分析を自ら行う。コッカイオンドクとは文字通り「国会音読」、すなわち、国会審議の議事録を国会の外にいる私たち市民が朗読するものである。**「議員の発言の意味、言葉の選び方、声のトーン、どんな心理で言葉を発しているか」などを考え「**実際に国会で審議されたリアルな内容を、声に出し」読み、「**よく見えない国会を可視化する」目的で、**石川県在住の市民が発案したコミュニケーション活動であり、2017 年には、市民からの権力チェック・情報公開の推進に貢献した個人・団体に贈られる「日隅一雄・情報流通促進賞」を発案者が受賞した。また 2018 年春には、コッカイオンドク！の「全国大会」が金沢市で開催予定である。

本パネルの流れは以下を予定している。まず、首相、議長、質問者、閣僚といった配役を演じるパネリスト数人で、国会議事録の一部（たとえば 2017 年 2 月 17 日、衆議院予算委員会、「共謀罪」に関する山尾志桜里議員と金田法務大臣・安倍総理大臣とのやり取り）を音読し、続いて、そのやり取りを対人コミュニケーション理論、社会言語学（語用論）、議論学など複数の異なる方法論で分析し、フロアから参加の研究者と討議する。

「お粗末答弁」「データ捏造」「答弁まったくかみ合わず」「揚げ足取り発言」「答弁撤回、陳謝」「印象操作」など、かなり辛辣な見出しの下で報道される、日本国憲法が定める「国権の最高機関」であり「国の唯一の立法機関」(４１条）である国会という議場におけるコミュニケーションの問題に対し、いわゆる「三角測量（triangulation)」的な学術アプローチで挑むことができればと考えている。

ユーモアの発話における日台の比較

黄　英哲（台中科技大学）

対人コミュニケーションの口頭伝達ではユーモアの発話は聞き手の笑いを誘い、会話の雰囲気を和らげる役割を果たしている。しかし、ユーモアの感受性は生得的なものであるが、ユーモアを発信する技術は意識的に獲得しなければならない部分が多いと考えられる。本発表では、口頭コミュニケーションにおいてユーモアを醸し出す能力が高いと思われる日本及び台湾の人気タレント各４名（計８名）による発話を対象データとした。ユーモアの発話の収集については、対話の場面が多く現れるバラエティー番組を選定し、その中の対象者のタレントの発話に焦点をおいた。会話の聞き手又は聴衆の笑いが起きた場合をユーモアの発話としてみなす。

各タレントはそれぞれ異なる特色を有するが、ユーモアの種類については「衝撃的な描写」、「ボケ」、「突発的言動」、「駄洒落」、「自虐」、「嘲笑」、「無茶な指示」、「エピソード語り」、「ものまね」の９種類に分けられた。本研究では上記すべての種類の特徴及び構造を分析して提示する。全体的には日本人タレントには「衝撃的な描写」が多いのに対して、台湾人男性タレントには「ボケ」と「駄洒落」が多い。「衝撃的な描写」については日本人はオノマトペを比較的多用している。「駄洒落」については台湾人タレントは同音異義表現を取り上げたり、表現を大袈裟にさせたりといった行動が比較的多く見られる。ユーモアの発話の拠り所について分析したところ、話し手と聞き手との関わり合い、聞き手の近況と今後の動向、聞き手とその関係者（家族、友人等）の趣味について関連性、発展性、矛盾等が提出されたことが多いことが分かった。

これらのユーモアの発話はすべて発話者の好奇心、鋭い観察力、豊富な想像力、速い連想、それに不意打ちの発言に依存する。本発表で取り上げ焦点を明らかにすることで、日本語又は台湾華語による円滑なコミュニケーションを目指す一助になると考える。

日本で就職する留学生の戸惑いと適応

守﨑　誠一（関西大学）
内藤　伊都子（東京福祉大学）

日本に留学する外国人の数は、右肩上がりに増加してきており、2017年5月現在、その数は267,042人（前年比11.6％増加）に達している（独立行政法人日本学生支援機構，2017a）。出身国別では、これまでも多数を占めていた中国と韓国からの学生がいまだ全体の約半数を占めるものの、ベトナムやネパールなど新たな国からの留学生が大幅に増加している。加えて、近年の留学生の特徴として、卒業・修了後に引き続き日本に滞在し続けることを希望する学生が増加しており、全体の中で多数を占めるようになってきている（独立行政法人日本学生支援機構，2017b）。

そのため、日本企業に就職を希望する外国人留学生が日本独特の就職活動にどのような問題を抱え、適応しているのか。特に、近年増加しているベトナムやネパールなどからの留学生が、これまでの中国や韓国からの学生とどのように異なり、どのような困難を抱えているのか、について明らかにすることは重要な研究課題になりつつある。本研究では、そのような研究の予備調査として実施したインタビュー調査の結果について報告する。

日本企業に就職が内定したベトナム人留学生3名と中国人留学生2名を対象に、半構造化インタビューをおこなった結果、日本で就職を希望した時期・理由については、比較的共通する結果となった。就職活動に関する情報源についても比較的共通していたが、自国人との情報交換が中国人の間ではあまり見られないという違いが見られた。このほか、就職活動での困難・日本人学生との違いについては、中国人が日本人と比較的同じように就職活動ができることが、逆に日本人学生と対等に競争しなければならないことにつながり、ベトナム人とは異なる中国人独特の困難や日本人との違いの意識を生んでいることが明らかとなった。発表では、それら共通点と相違点について考察するとともに、今後の研究課題についても論じる。

B 会場(DH3 年教室)	研究発表	組織・対人
Room B	Presentation	Organizational and Interpersonal

「婚活支援」における男女関係の発展に関する研究
−男女関係における社会交換理論の適用について−

佐々木　研一（株式会社イノベーションゲート）
宮原　哲（西南学院大学）

少子高齢化が進み、労働人口が減少していることは日本では大きな問題として取り上げられている。コミュニケーションの問題とは一見結びつかないように思えるが、子どもを作る前に結婚、結婚の前に恋愛という流れで進むのが一般的であり、コミュニケーション能力の向上が少子化に歯止めをかけることができるかどうか、という問題はコミュニケーション学研究で取り上げるべき課題である。そのため、本研究では、結婚支援サービスを利用する男女のコミュニケーション能力が「結婚活動」（婚活）の成功にどのように影響しているかについて調査、考察する。

婚活支援サービスを利用する男女は、紹介され、初めてお互い会って話し、その後、今後交際を続けるか決定する。出会いの場では、これまで全く接点のない男女が相互に交流し、短い時間で自分の結婚相手として適切かを選択しなければならない。このように、当事者同士のコミュニケーションは出会う前の段階、出会い、そしてその後の関係構築や維持、発展のすべての過程で重要な位置を占めることは想像できるが、現状では科学的な、つまり具体的な手段や知識とそれらの予想される手法が提示されていない。先行研究調査を行い、自分の価値観と相手の求める価値観が一致している組み合わせは交際成功率が高いことが分かった。これは価値観が一致していることで対人魅力を感じ取り、コミュニケーションを取る代償が低くなっていると予測できる。

そのため、本研究においては、婚活サービスを利用する男女が交際をより進め、結婚に至った理由を実際に成功例に関わった（結婚に至った）男女にインタビューを行うことで、交際に進んだ人と進まなかった人の判断をどのようにしたかを明らかにし、関係性満足におけるコミュニケーション上の代償と報酬の具体的な内容を確認できるよう質問を行う。

日本版コミュニケーション・オーディット指標開発

山口生史（明治大学）
山口麻衣（ルーテル学院大学）

本発表では、2012 年~2017 にかけてインタビュー、フォーカスグループインタビュー、プリテスト、パイロットスタディ、2 時点パネル調査を経て開発された日本版コミュニケーション・オーディット指標が、その後いかに修正されたかを報告する。インターネット調査企業に委託し、介護施設従業員 1277 名に 2016 年 5 月に質問票を配信した。職種を介護職、看護職、相談職に絞り、合計 377 人から回答があった（有効回答回収率 29.5 %）。例として「チームコミュニケーション雰囲気」は、分析前は全 7 項目あったが(4 項目は「オープンコミュニケーション」、3 項目は「結束コミュニケーション」)、探索的因子分析（EFA）の結果、一因子解で固有値が分散の説明力が 60%以上、因子負荷量が 0.40 以上、信頼係数(α)が 0.80 以上の基準に対して、固有値が基準を満たさず、1 項目の共通性が低かった。その 1 項目を削除すると固有値が 62%となった。その後、確証的因子分析（CFA）を行い因子構造の適合性を確認し、最終の構成変数（質問項目）を作成した。CFA の結果は、以下のとおりである。

(1)7 項目一因子：CFI= 0.937, RMSEA = 0.107, AIC = 6404.894
(2)6 項目一因子：CFI= 0.829, RMSEA = 0.171, AIC = 6566.467
(3)7 項目二因子：CFI= 0.960, RMSEA = 0.089, AIC = 6368.337
(4)6 項目二因子：CFI= 0.992, RMSEA = 0.047, AIC = 5408.721

(4)のモデルが最も良い適合性を示し、AIC も(4)が最も小さい。したがって、この次元は、オープンコミュニケーション 3 項目(α＝0.86)と結束コミュニケーション 3 項目(α＝0.84)の 2 次元となった。本発表では、その他の指標の結果も報告する予定である。

本研究の調査は、2012～2017 年度 科学研究費補助金（基盤研究 B 24330177、研究代表者山口生史）の助成を受けて行われた。

6 月 9 日（土）　Saturday, June 9　12:30-14:00　Session 2

C 会場（DH2 年教室）	**パネル**
Room C	**Panel　Discussion**

歴史研究とレトリック研究の交錯点を探る
―『狂気の歴史』を読む―

司会：柿田秀樹（獨協大学）
発表者：是澤　克哉（広島修道大学）
松島　綾　（立命館大学）
宮脇かおり（立命館大学）
レスポンデント：北本　晃治（帝塚山大学）
中西満貴典（岐阜市立女子短期大学）

レトリック研究者の多くが『監獄の誕生』や『性の歴史』を取り上げてフーコーの権力論や生政治といった概念に注目する一方、最初の著作である『狂気の歴史』やその内容については論じてこなかった。昨年の『言葉と物』に焦点をあてたパネルに引き続き、今回のパネルは、こうして忘れられてきた、あるいは（無意識に）避けられてきた『狂気の歴史』を読み、レトリック研究に新たな展望を切り開くことを目的とする。

『狂気の歴史』でフーコーが論じたのは、狂気や監禁の存在理由や、それらが社会にもたらした効果や結果を問うことではなかった。むしろ、『狂気の歴史』は、心理学が誕生する条件を狂気や監禁といった記号が特定の意味を持つ実践の変容過程として詳細に描き出している。これは、コミュニケーション研究が扱う社会構造や文化、もしくは知の枠組み（エピステーメー）を論じる際に、記号や表象が問い直すべき領域であることを示唆している。

3 名の発表者は『狂気の歴史』でなされた時代区分（ルネサンス期、古典主義時代、近代）に沿ってそれぞれの担当章に基づいた発表を行い、2 名の応答者がそれらにコメントする。ルネサンス期を担当する是澤は、フーコーによる阿呆船の歴史研究を題材にイメージと言説の相関とレトリック研究の交錯を探る。古典主義時代を担当する松島は、古典主義時代の監禁を装置として捉え、監禁が社会学的な制度の問題ではなく、文化と表象を核心とするレトリック研究の観点から考察されるべき重要性を論じる。近代を担当する宮脇は、監禁によって狂気が精神医学の観察対象として客体化される過程に注目し、そこにレトリックが果たした役割を論じる。

本パネルは表象・記号化される（以前の）「狂気」という対象・主題への関心がいかに生まれ、それを知の対象として統治の経済に組み込もうとする心理学や臨床の学問がいかなる形で芽吹き、歴史的に変遷したのかを考察していく。

6 月 10 日（日）　Sunday, June 10　9:30-11:00　Session 3

B 会場（DH3 年教室）	**研究発表**	**政治**
Room B	**Presentation**	**Political Communication**

北朝鮮と対話
―政治外交に見る対話の意味と対話言説の特徴―

小坂　貴志（神田外語大学）

2017 年は北朝鮮の核・ミサイル開発の加速化とミサイル発射に世界各国が揺り動かされた年となった。2018 年の本要旨執筆時点では、アメリカを中心にした対北朝鮮への圧力姿勢を背景にし、2 月開催の平昌五輪の恩恵にもあずかり、南北間関係に一応の融和ムードが漂ってはいるものの、五輪閉幕直後に予定されている米韓軍事合同演習の実施をはじめ、特にアメリカが率先して継続した圧力姿勢を示すなど、朝鮮半島情勢は落ち着きを取り戻す気配を見せてはいない。

本研究では、対話論の観点から、北朝鮮を巡る一連の動きの中で世界の政治家が使用する「対話」の言葉の意味と対話言説の特徴を分析することを目的とする。具体的には、新聞・テレビ・インターネットなどのメディアによって伝えられるニュースに引用される「対話」の言葉を拾い出し、各国の立ち位置や「対話」の言葉が発話された文脈を考慮に入れつつ、「対話」の言葉の意味の解釈をおこなっていく。さらに、対話にまつわる言説としてどのような特徴があるかを、対話論の知見に基づいて再解釈をする。

このような手順に基づき「対話」の言葉を分析した結果、先行研究がとりあげているように、対話とは矛盾をはらむ概念であることが確認できた。北朝鮮を巡る「対話」の使用にも同じく矛盾概念が関連しており、それは各国が示す北朝鮮への政策や要人の発話にもみとめられる。また、発話というミクロの単位とは別に、マクロの視点から枠組みとしての対話を考察すると、「対話」の言葉が各国要人によって戦略的に使われている様子を確認することができる。

本研究では、ニュース報道を通しての「対話」の言葉の使用を分析しているが、今後は、ニュース報道の対話使用に関する政策やニュース報道以外の「対話」の言葉を使用する際の意味について、情報源に直接確認するなど、「対話」の言葉の意味の幅を広げるなどの工夫を凝らしていく予定である。

Civil(ity)概念を再訪する－日本の政治コミュニケーションのために－

田島慎朗（神田外語大学）

米国における相次ぐ学校での銃乱射事件や保守的な政治リーダーの台頭、リベラリズムの限界が論じられるなか、Civility の概念はコミュニケーション研究者の間だけでなく、政治言説やニュースの中でも注目を集めている。日本語の直訳が困難なこの言葉は、人単位での市民のあり方を規定するだけでなく、特定の文化・集団の規範の中で機能したり、エチケットとしての適切なふるまいを指したりと、多義的な使い方をされる。

ここで考察するのは、この語が何を意味し、コミュニケーション／レトリック戦略としてどのようなときにどう使われ、それが民主主義と自由という概念、そして政治演説やデモ、路上パフォーマンスといった政治行動にどうかかわりうるかということである。特に、米国のコミュニケーション研究が直接的・間接的に civil(ity) を扱った学術的考察から知見を得て、それをどう日本の政治文脈に位置付けることが出来るかという点に関心を示す。

発表では、まず米国のコミュニケーション研究でなされた civil(ity)の議論を整理し、考察する。次に、日本で civility に相当しうる概念がどう論じられてきたかを、コミュニケーション学と諸関連学問の文献から読みといていく。米国の civil(ity)に関する学術的論考を日本の文脈に当てはめることで、日本における civil(ity)の議論を興していくことがここでの目標である。最後に、日本のデモや政治パフォーマンス実践に対する反応のいくつかをみていくことで、前節の内容を検証しながら、日本における政治実践の可能性と限界を見ていくとともに、米国で civil(ity)概念のもとに論じられてきたいくつかのアイディアの日本における有用性を論じる。

自由とコミュニケーションについての一考察

平野　順也（熊本大学）

自由は民主主義の根幹である。自由主義と共同体主義との間では、自由の位置付けについての論争が活発に行われてきた。自由は社会の多様性を受容するためにも重要であるが、差別的憎悪表現を例にするまでもなく、自由の過信が問題を生じされることもまた事実だ。しかし、自由がもたらす問題は、他人への害だけではない。　トドロフは、自由について次のように述べている。彼は、これまで自由は民主主義の根本的な価値だと捉えていた。しかし、使用する方法によっては、自由は民主主義の存在を揺らがせる脅威でもあるということに気付いたという。そして、「今日、民主主義にのしかかっている脅威は、外部から、つまり公然とその敵を自称する者たちの側からやって来るのではなく、むしろ内部から、つまり民主主義の価値観を守ると主張するイデオロギー、運動、または策動から生じる」のだ。現代社会では、どのような場合、自由が脅威へと変化するのか。ランシエールのことばを借りるなら、それは自由が「現代の個人の際限なき欲望」と化す時、と言うことができるだろう。表現の自由が保障された現代社会では、人びとの思考に対して「弾圧」といった暴力は存在することはない。しかし、「個人の際限なき欲望」によって、自由な思考そのものが劣化するのだ。自由が過度に信じられるようになり、それが「個人の際限なき欲望」に従って使用される現代社会でのコミュニケーション活動には混乱が確認することができる。共生を可能にする自由によって、他人の排除が行われているだけではなく、我われ自身の思考ですら停止させられてしまっているのだ。本発表では、思考、権利、共生といった鍵語を中心に、脅威としての自由を分析し、自由が現代社会のコミュニケーションに与える影響について考察する。

C 会場（DH2 年教室）	**研究発表**	**レトリック**
Room C	**Presentation**	**Rhetorical Communication**

グッドナイトの論争分析の一般化に関する一考察
―遺伝子組換え作物に関する論争を発端として―

山本　輝太郎（明治大学）

本発表は、議論学者のトーマス・G・グッドナイト（Thomas G. Goodnight）の提唱する社会論争分析の枠組みについて考察し、科学・技術と社会の問題に関する論争分析の手法として一般化を目指すものである。

社会論争分析では、論争的な状況で対立する主張の背景にある省略三段論法（enthymeme）の推論に対する批判作用を明らかにすることができる。そして、省略三段論法が省略しているものを批判するコミュニケーション作用が、論争のなかでどのように用いられているかを分析することも可能である。省略三段論法が省略しているものを「暗黙の前提」とすると、社会論争分析とは、論争的な状況における暗黙の前提の齟齬について分析可能な理論である。

発表者は、このような社会論争分析は科学・技術と社会の問題に関する分析手法として特に有効なのではないか、と考えている。たとえば、我が国における遺伝子組換え作物の論争では、①不確実性を伴う知見に対する評価、②社会を運営する主体とその権利に集約できる観点において、対立する意見に対する暗黙の前提への批判がみられている。

①の観点において否定論は､｢国の審査を通過した農作物は安全である｣とする肯定論の前提を批判する。一方肯定論は、否定論が暗黙の前提としている「従来の農作物の安全は科学的根拠に基づいてきた」には思い込みに基づく錯覚が介入していることを指摘する。

②の観点において否定論は、遺伝子組換え作物がどのような技術であろうと、それを受け入れるかどうかの最終決定は消費者にあることを主張する。対して肯定論は､｢市民への情報提供は消費者の権利によって保障されるべきである｣とする否定論の暗黙の前提が不安感情を正当化するための詭弁に過ぎないことを批判する。

本発表では、いくつかの事例を取り上げ、グッドナイトの分析手法が広く科学・技術と社会の問題に関する議論の再整理と論争の背景構造を探る一つの方法であることを示していきたい。

Vulnerability in Resistance:
- A Japanese (Former) Hostage's Body as Irony -

Naoki Kambe (Rikkyo University)

Nahoko Takato, a Japanese female aid worker, is one of the hostages taken captive in Iraq in 2004. When Takato and other two civilians returned to Japan after being released, rather than being welcomed with celebration and joy, they became the target of criticism. Takato, in particular, was severely traumatized by the Japanese public and media and her body, in turn, exhibited her fragility, defenselessness, powerlessness, and vulnerability to the entire nation. Although it has passed 14 years since the incident, Takato has never been freed from the trauma but still continues her humanitarian aid work in Iraq. In this paper, I analyze visual and verbal texts of Takato's vulnerable body represented through various reports, photographs, videos, and interviews after the hostage incident in 2004 and argue that her humanitarian aid is a response or resistance to her own vulnerability, trauma, and marginalization in Japanese society. To support my argument, I follow deconstructive and constructive functions of postmodern irony elaborated by Linda Hutcheon and regard Takato's vulnerable body as irony. In particular, I argue that the deconstructive function of irony or the marginality of Takato's vulnerable body through her mobility destabilizes meanings of "proper" citizenship influenced by neoliberalism whereas the constructive function of irony or the liminality through her "rebirth" in Iraq after the hostage crisis opens multiple spaces for her to perform a new identity with a new meaning of humanitarian action.

日本コミュニケーション学会
第 48 回年次大会
プロシーディングス
2018 年

Japan Communication Association
48th Annual Convention
Proceedings
2018

目次

Contents

［パネル］政治

コミュニケーション研究と（しての）「コッカイオンドク！」..... 24
池田　理知子（福岡女学院大学）
松島　綾（立命館大学）
宮脇　かおり（立命館大学）
田島　慎朗（神田外語大学）
長谷川　聡（北海道医療大学）
是澤　克哉（広島修道大学）
師岡　淳也（立教大学）
福本　明子（愛知淑徳大学）
小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）
青沼　智（津田塾大学）

異文化　Intercultural Communication

ユーモアの発話における日台の比較..... 26
黄英哲（台中科技大学）

日本で就職する留学生の戸惑いと適応..... 28
守崎　誠一（関西大学）
内藤　伊都子（東京福祉大学）

組織・対人　Organizational and Interpersonal Communication

「婚活支援」における男女関係の発展に関する研究
-男女関係における社会交換理論の適用について-..... 30
佐々木　研一（株式会社イノベーションゲート）
宮原　哲（西南学院大学）

日本版コミュニケーション・オーディット指標開発..... 32
山口　生史（明治大学）
山口　麻衣（ルーテル学院大学）

［パネル］　レトリック
歴史研究とレトリック研究の交錯点を探る
-『狂気の歴史』を読む―..... 34
是澤　克哉（広島修道大学）
松島　綾　（立命館大学）
宮脇　かおり（立命館大学）

［パネル］　コミュニケーション教育研究会共催
ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る　第２弾..... 36
五十嵐紀子（新潟医療福祉大学）
池田理知子（福岡女学院大学）
石橋 嘉一（青森中央学院大学）
塙　幸枝　（神田外語大学）

政治　　Political Communication

北朝鮮と対話―政治外交に見る対話の意味と対話言説の特徴―..... 38
小坂　貴志（神田外語大学）

Civil(ity)概念を再訪する－日本の政治コミュニケーションのために－..... 40
田島　慎朗（神田外語大学）

自由とコミュニケーションについての一考察..... 42
平野　順也（熊本大学）

レトリック　　Rhetorical Communication

グッドナイトの論争分析の一般化に関する一考察
―遺伝子組換え作物に関する論争を発端として―..... 44

山本輝太郎　（明治大学）

Vulnerability in Resistance:
- A Japanese (Former) Hostage’s Body as Irony -..... 46

Naoki Kambe (Rikkyo University)

コミュニケーション研究と（しての）「コッカイオンドク！」

池田　理知子（福岡女学院大学）
松島　綾（立命館大学）
宮脇　かおり（立命館大学）
田島　慎朗（神田外語大学）
長谷川　聡（北海道医療大学）
是澤　克哉（広島修道大学）
師岡　淳也（立教大学）
福本　明子（愛知淑徳大学）
小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）
青沼　智（津田塾大学）

反原発・脱原発デモや反特定機密法・反安保法案の集会など、「国会前」が市民によるコミュニケーションの場として定着して久しい。首相官邸や議員会館、国会図書館周辺の街頭、また憲政会館横の国会前庭では、大抵、誰かが立ち、思い思いの方法で声をあげている。

一方、衆議院、参議院といった国会「内」の議場におけるコミュニケーション（国会審議）も、最近、マスコミ等でにわかに脚光を浴びている。本パネルは、そういった国会審議のやり取りを、コミュニケーション研究の立場から考察する。

具体的には、全国各地で行われている「コッカイオンドク！」というコミュニケーション実践を研究者自身が行い、加えて、それに対する分析を自ら行う。コッカイオンドク！とは文字通り「国会音読」、すなわち、国会審議の議事録（あるいは中継録画からの「文字起こし」原稿）を国会の外にいる私たち市民が朗読するものである。公式サイトには以下のような説明がある。

> わたしたちが大切な票を入れた国会議員さんたちは、
> 国会で何を話しているんだろう？
> わたしたちの代表として、真摯に誠実に国民と向き合っていてくれているのかな？
> **いま国会で起きていることを、もっと知りたい・・・**
>
> **その、よく見えない国会を可視化する試みのひとつが、 コッカイオンドク！です。**
>
> 実際に国会で審議されたリアルな内容を、声に出してみると、実に様々なことがわかってきます。 **議員の発言の意味、言葉の選び方、声のトーン、どんな心理で言葉を発しているかなど、会議録を読むだけではわからないことが見えてきます。** （https://believe-j.jimdo.com/））

市民によるこのコミュニケーション実践については、2017 年、市民からの権力チェック・情報公開の推進に貢献した個人・団体に贈られる「日隅一雄・情報流通促進賞」をその発案者が受賞し、新聞等でも取り上げられた。さらには 2018 年春には、コッカイオンドク！の「全国大会」が石川県金沢市で開催予定である。

本パネルの流れは以下を予定している。まず、首相、議長、質問者、閣僚といった配役を演じるパネリスト数人で、国会議事録の一部（たとえば 2017 年 2 月 17 日、衆議院予算委員会、「共謀罪」に関する山尾志桜里議員と金田法務大臣・安倍総理大臣とのやり取り）を音読し、続いて、そのやり取りを対人コミュニケーション理論、社会言語学（語用論）、議論学など複数の異なる方法論で分析し、フロアから参加の研究者と討議する。

「お粗末答弁」「データ捏造」「答弁まったくかみ合わず」「揚げ足取り発言」「答弁撤回、陳謝」「印象操作」など、かなり辛辣な見出しの下で報道される、日本国憲法が定める「国権の最高機関」であり「国の唯一の立法機関」（４１条）である国会という議場におけるコミュニケーションの問題に対し、いわゆる「三角測量（triangulation)」的な学術アプローチで挑むことができればと考えている。

ユーモアの発話における日台の比較

黄　英哲（台中科技大学）

1. はじめに

ユーモアは可笑しみ、滑稽から発展してきたものである。ユーモアの発話は聞き手の笑いを誘い、会話の雰囲気を和らげる役割を果たしている。しかし、ユーモアに対する感受性は個々人の生育環境などに深く根ざしている部分があるが、ユーモアを発信する技術は意識的に獲得しなければならない部分が多いと考えられる。本研究では、日本と台湾のユーモアのある発話を分析し、それぞれの形式と構造を比較する。分析の対象はユーモアを醸し出すことが上手な日本と台湾のタレントである。分析の焦点として（1）各対象者のユーモアのスタイル及びその構造の特徴、（2）ユーモアの発話の醸し出し方、（3）ユーモアの発話の分類及び形式、（4）日台（日本と台湾）両方の類似点と相違点、の四点を挙げる。

2. 先行研究と本発表との関連

本発表で指すユーモアは口頭コミュニケーションに用いられるもので、そのスタイルの分類について雨宮（2016）が取り上げた「親和的ユーモア、攻撃的ユーモア、自己高揚的ユーモア、自虐的ユーモア」との四種類から示唆を得ている。

笑いはユーモアによるところが大きい。日本語の場合、初対面状況における笑いの構造について池田（2003）はディリケートな内容に関する質問は笑いと共に発せられ、受け手の笑いをも引き出すことを指摘している。同論考には「話者自身のトラブルを披露する発話の終了時点付近では、笑いが発せられ、受け手も笑いで応じる」という指摘も見られた。しかし、いわゆるディリケートな内容と話者自身のトラブルについてどう伝えれば笑いの効果を引き出すのだろうか。本発表では、それについて探る。

冗談程度で話し相手の悪口を言ったり反論したりして対立的な感覚を醸し出すのもユーモアの効果がある。その醸し出し方にとして、大津(2004)は「対立表明」及び「わざと誤ったことや理不尽なことを言うこと」を取り上げた。同論考では「対立というものは冗談であることの合図としては発話の繰り返し、韻律の操作、感動詞の使用、スタイル・スイッチング、笑い」という観察の結果も言及されている。本研究では、ユーモア効果の醸し出し方について大量の会話データから新たに洗い出そうとし、特に日本と台湾を比較し、それぞれの特殊性を見出そうとする。

3. 研究データ

本発表では、表 1 に示した通り、ユーモアを醸し出す能力が高いと思われる日本及び台湾の人気タレント各 4 名（計 8 名）による発話を対象データとし、実際に発されたユーモアの発話を 100 ずつ（計 800）を取り上げて分析した。ユーモアの発話の収集については、トークと対話の場面が多く現れるバラエティー番組を選定し、その中の対象者のタレントの発話に焦点をおいた。会話の聞き手又は聴衆の笑いが起きた場合をユーモアの発話としてみなす。

表 1 観察の対象

日本語	台湾華語
明石家さんま：男性 『さんまのまんま』：フジテレビ系列、「関西テレビ」と「吉本興業」共同製作，1985 年 4 月 8 日～2016 年 9 月 24 日。	張菲：男性 『綜藝大哥大』：「頤合製作会社、中視テレビ会社監制」2002 年 4 月 20 日～2011 年 9 月 24 日。

上田晋也：男性 『しゃべくり 007』:日本テレビ系列，2008 年 7 月 12 日～現在。 『おしゃれイズム』:日本テレビ系列，2005 年 4 月 10 日～現在。	胡瓜：男性 『綜藝大集合』:「民視テレビ会社」，2001 年 11 月 11 日～現在。 『歡樂智多星』:「衛視中文テレビ会」，2011 年 3 月 7 日～現在。
今田耕司：男性 『あるある議事堂』:テレビ朝日，2016 年 4 月 10 日～現在。	張小燕：女性 『SS 小燕之夜』:「映畫傳播製作，中天娯楽台テレビ会社」，2010 年 8 月 2 日～2017 年 1 月 2 日。 『TVBS 小燕有約』2017 年 3 月 6 日～現在。
有吉弘行：男性 『有吉反省会』:日本テレビ系列，2013 年 4 月 7 日～現在。	呉宗憲：男性 『我猜我猜我猜猜猜〈人不可貌相〉』:「中視テレビ会社」，1996 年 7 月 4 日～2011 年 3 月 4 日。

4. 分析の結果

各タレントはそれぞれ異なる特色を有するが、ユーモアの種類については「衝撃的な描写」、「ボケ」、「突発的言動」、「駄洒落」、「自虐」、「嘲笑」、「無茶な指示」、「エピソード語り」、「ものまね」の 9 種類に分けられた。「衝撃的な描写」とは比喩、対比、矛盾を基に、簡潔な形容詞、オノマトペ、諺、俗語を用いてあまり気付かれていない事実を指摘したり、同感だと思われやすいことをまとめたりすることである。「ボケ」とはありそうな間違いを提出したり、大袈裟な意思表明をしたりすることである。「突発的言動」とは聞き手の期待と反したり、大きく外れたりする発言をしたり、何らかの根拠に基づいて大胆な質問・決断・確認・推測をしたりすることである。「駄洒落」は同音異義表現の玩味の言葉遊びである。「自虐」は自分の失敗談をすることで、「嘲笑」は他人の言動の矛盾、無邪気さを突っ込むことである。「無茶な指示」は話し相手の的確な主張・指摘・無邪気さを禁止したり、指摘したりすることである。「エピソード語り」とはジョーク、他人のエピソードを提出することである。「ものまね」とは他人か聞き手の言動を模倣することである。本研究では上記すべての種類の特徴及び構造を分析して提示する。

全体的には日本人タレントには「衝撃的な描写」が多いのに対して、台湾人男性タレントには「ボケ」と「駄洒落」が多い。「衝撃的な描写」については日本人はオノマトペを比較的に多用している。「駄洒落」については台湾人タレントは同音異義表現を取り上げたり、表現を大袈裟にさせたりといった行動が比較的多く見られる。ユーモアの発話の拠り所について分析したところ、話し手と聞き手との関わり合い、聞き手の近況と今後の動向、聞き手とその関係者（家族、友人等）の趣味について関連性、発展性、矛盾等が提出されたことが多いことが分かった。

これらのユーモアの発話はすべて発話者の好奇心、鋭い観察力、豊富な想像力、速い連想、それに不意打ちの発言に依存する。本発表で取り上げた焦点を明らかにすることで、日本語又は台湾華語による円滑なコミュニケーションを目指す一助になると考える。

引用文献

雨宮俊彦(2016)『笑いとユーモアの心理学何が可笑しいの？』ミネルヴァ書房。
池田智子（2003）「日本語対面状況における笑いの構造と機能」『社会言語科学』第 52 号、pp. 52-60。
大津有美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ･ポライトネス―「遊び」としての対立行動に注目して―」『社会言語科学』第 44 号、pp. 44-53。

日本で就職する留学生の戸惑いと適応

守﨑　誠一（関西大学）
内藤　伊都子（東京福祉大学）

はじめに

日本に留学する外国人の数は、右肩上がりに増加してきており、独立行政法人日本学生支援機構(2017a)によると、2017年5月現在、その数は267,042人（前年比11.6%増加）に達している。出身国別では、これまでも多数を占めていた中国と韓国からの学生がいまだ全体の約半数を占めるものの、ベトナムやネパールなど新たな国からの留学生が大幅に増加している。加えて、近年の留学生の特徴として、卒業・修了後に引き続き日本に滞在し続けることを希望する学生が増加しており、全体の中で多数を占めるようになってきている（独立行政法人日本学生支援機構，2017b）。

本研究の目的

日本企業に就職を希望する外国人留学生が増加するなかで、彼ら留学生が日本独特の就職活動にどのような問題を抱え、適応しているのか。特に、近年増加しているベトナムやネパールなどからの留学生が、これまでの中国や韓国からの学生とどのように異なるのか、どのような困難を抱えているのか、について明らかにすることは、重要な研究課題となりつつある。本研究では、そのような研究の予備調査として実施したインタビュー調査の結果について報告する。具体的には、日本企業に就職が内定した留学生に対して、日本での就職を考えた時期、就職の目的、就職活動の際の情報源、準備したこと、就職活動中に感じた困難、日本人との違いなどについて聞き取った結果について報告する。

方法

調査は、愛知県名古屋市ならびに大阪府吹田市にある大学を卒業・修了予定の 5 名の学生に対して、それぞれ約 2 時間の半構造化インタビューを 2018 年 2 月に実施した。具体的には、以下の 5 名の学生に対してインタビュー調査を実施した。

A さん：ベトナム人、女性、大学院生、28 歳（1989 年生）、2014 年 5 月来日
B さん：ベトナム人、女性、大学院生、28 歳（1989 年生）、2015 年 4 月来日
C さん：ベトナム人、女性、学部生、28 歳（1989 年生）、2012 年 7 月来日
D さん：中国人、女性、大学院生、27 歳（1990 年生）、2013 年 4 月来日
E さん：中国人、男性、学部生、41 歳（1976 年生）、2012 年 12 月来日

インタビューに際しては、事前に「インタビューガイド」を作成して尋ねることを準備しておき、順次それらを尋ねながら調査協力者の回答に応じて追加の質問をおこなった。

結果

日本での就職を希望した時期・理由　【ベトナム人学生】留学当初は、日本での就職を考えていなかったが、日本での生活が慣れた環境となったことから考えるようになった。また、ベトナムと比べて日本の治安が良く、食べ物が安全であること、また、日本人の真面目な働き方や日本の文化に対する興味なども日本での就職につながった。そのほか、28 歳という現在の年齢は、ベトナムでキャリアを積み始めるには遅いが、日本では遅くないことも日本での就職を考えた理由である。【中国人学生】大学院生については、大学院進学後に日本での就職を考えるようになった。理由は、留学後に自身の日本語能力が向上していくことが嬉しくて、もっと日本語能力（仕事に使う日本語も含めて）を上げたいと考えた。そのほか、日本での生活の便利さも日本での就職を希望した理由である。学部生については、当初、日本での就職と中国に帰国して日本語教師になることの両方の可能性について考えていた。後になって、もともと日本の環境の良さに対するあこがれもあって、日本に住み続けたいと考えるようになった。【結論】日本での就職を希

望した時期と理由には、ベトナム人学生と中国人学生の間で多く点で共通する部分が見られた。

就職活動に関する情報源　【ベトナム人学生】マイナビやリクナビ、ハローワーク、留学生向け就職フェア、大学の進路指導室などから情報を得た。就職活動に慣れてきてからは、より個人で活動するようになり、活動を通じて出会った自国人と情報交換などもしていた。【中国人学生】大学院生については、マイナビやリクナビなどのウエブサイトのほか、大学のキャリアセンターや合同説明会などから情報を得ていた。日本人との情報交換は全く無く、自国人についても既に就職している元留学生からアドバイス（どの時期にどんなことをしたらいいのかなど）をしてもらった程度。学部生については、大学やネットから個人的に就職に関する情報を集めていた。大学院生と同様に自国人の先輩からは、就職に必要な情報を得ていた。【結論】ベトナム人学生と中国人学生の情報源は比較的共通していたが、自国人との情報交換が中国人の間ではあまり見られないという特徴があった。このような傾向は、留学生は就職活動において自国人をライバル視したり、自身の就職がうまくいかなかった際に恥をかきたくないので本音を隠す傾向がある、との先行研究（守﨑・内藤, 2017）の結果とも整合する。

就職活動での困難・日本人学生との違い　【ベトナム人学生】自身の専攻と関連する仕事の募集が少なかった。また、日本での就職は日本語だけでなく英語が必要で、英語ができないと選択肢が狭まると感じた。同じ留学生であってもベトナム人向けの募集は中国人向けより少ない。日本人学生との違いについては、大学院生は違いや気になったことなどは無く、逆に、ベトナム語ができることが有利と感じた。学部生は、日本人の方が仕事の選択肢が多かったり、有名で大きな会社の募集があるなど有利であると感じた。【中国人学生】大学院生については、最初、日本の就活のやり方がわからなくて不安であったが、3 か月くらいで少しわかるようになり不安も減ってきた。それでも、内定を得るまでの期間が長くて大変で、特にグループディスカッションなど周りがほとんど日本人の中で意見を言うときに、聞いてもらえなかったり、距離を感じた。そのほか、企業ごとに受ける試験（SPI や玉手箱など）が違ったり、就職活動に伴う出費（交通費など）も負担であった。日本人学生との違いについては、合同説明会でのメモ取りの大変さや日本人なら当たり前に知っている就職活動に関わる情報の不足、OB・OG とのつながりのなさ、など様々な面で違いを感じた。学部学生についても、エントリーをして、企業からの連絡を待って、それから審査を受けて、という就職活動の一連のプロセスを大変だと感じた。特に、男性は女性よりも就職に不利だと感じた。【結論】ベトナム人学生と中国人学生の間で違いが見られた。理由として、中国人が日本人と同じように就職活動ができる（同じ漢字文化圏であったり、比較的文化に共通性がある）ことが（守﨑・内藤, 2017)、逆に日本人学生と対等に競争しなければならないことにつながり、ベトナム人にはない中国人独特の困難や日本人との違いの意識につながったと考えられる。

引用文献

独立行政法人日本学生支援機構（2017a）.　平成29 年度外国人留学生在籍状況調査結果 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/__icsFiles/afieldfile/2018/02/02/data17.pdf （2018年2月11日）

独立行政法人日本学生支援機構（2017b）平成27年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_d/__icsFiles/afieldfile/2017/04/17/ degrees15_1.pdf （2018年2月11日）

守﨑誠一・内藤伊都子（2017）. 留学生は日本での就職活動にどのような問題を抱え、適応しているのか 多文化関係学会第16回大会抄録集

「婚活支援」における男女関係の発展に関する研究

-男女関係における社会交換理論の適用について-

佐々木　研一（株式会社イノベーションゲート）
宮原　哲（西南学院大学）

少子高齢化が進み、高齢者を支えるはずの労働人口が減少の一途をたどることは日本では大きな問題として取り上げられている。一見コミュニケーションの問題とは結びつかないように思えるが、子どもを作る前に結婚、結婚の前に恋愛という流れで進むのが一般的であり、コミュニケーション能力の向上が少子化に歯止めをかけることができるかどうか、という問題は日本でのコミュニケーション学研究で取り上げるべき喫緊の課題である。本研究では、結婚支援サービスを利用する男女のコミュニケーション能力が「結婚活動」（婚活）の成功にどのように影響しているかについて調査、考察する。

近年、若年世代の男女の未婚率が上昇しており、個人の婚活では限界があり、「婚活支援」の必要性が増している（材木,2010)。婚活支援サービスに対して抵抗感を感じる人が多かったが（結婚情報サービス協議会,2000)、山田らによる『「婚活」時代』が発表された 2008 年以降は、婚活支援サービスを利用するなど、意識的に結婚に向けて行動することへの抵抗感が弱められたといえる（大瀧 2016)。婚活支援サービスを利用するには、まず、サービス提供企業に登録する必要がある。次に、写真やプロフィール（学歴、職業、趣味、自己 PR）を作成する。異性から選ばれるためには、写真やプロフィールが異性から見て魅力的でなくてはならない。そのため、サービス提供企業によるサポートに従い作成する。サービス提供企業が、利用者の希望に合った異性を紹介し、その中から会いたいと思う人を選ぶ。ここでは、自分が選ぶだけではなく、相手からも選ばれる必要がある。お互い会いたいとなった利用者には、出会いの場が設定され、初めてお互い会って話し、その後、今後交際を続けるか決定する。出会いの場では、これまで全く接点のない男女が相互に交流し、短い時間で自分の結婚相手として適切かを選択する。

このように、当事者同士のコミュニケーションは出会う前の段階、出会い、そしてその後の関係構築や維持、発展のすべての過程で重要な位置を占めることは想像できるが、現状では科学的な、つまり具体的な手段や知識とそれらの予想される手法が提示されていない。そこで本研究を結婚にたどり着くために必要なコミュニケーション能力を明らかにする長期的、かつ大規模な研究の第一弾ととらえ、婚活支援サービスを利用し、成婚した男女の対人魅力を探ることを目的とする。どのような人間関係も当事者同士が何らかの対人魅力を感じ取り、その評価がその後の言語、非言語メッセージに「フィルター」をかけると考えられている（Duck, 1973)。そのため、先行研究調査として、相互の価値観が一致するかどうかによってその後の関係がどう影響を受けたのかについて調査する。方法として、対人関係に関わる行動の優先順位を測定する検査（以下、価値観検査）（豊田・川端・松下,2005）と結婚相手に求める対人関係に関わる行動の優先順位を測定する検査(以下、相手に求める価値観検査)(佐々木・豊田,2011)の結果を用い、男女の組み合わせの一致度を求め、交際率に影響しているかの確認を行った。男女の組み合わせの一致度は、下記の方法で求めた。

（男女の組み合わせの一致度）

１．女性の「価値観検査」と男性の「相手に求める価値観検査」結果の一致度を算出する
２．男性の「価値観検査」と女性の「相手に求める価値観検査」結果の一致度を算出する
３．１，２の結果を組み合わせ、組み合わせの一致度を算出する

2014 年から 2016 年までに 23,310 人の婚活支援サービス利用者が 2 つの検査を受検した。分析に用いた組み合わせ数は 146,955 件であった。組み合わせ一致度が高い組み合わせと組み合わせ一致度の低い組み合わせにおける交際率の比較分析を行ったところ、組み合わせ一致度の高い組み合わせの交際成功率が 28.8%、組み合わせ一致度の低い組み合わせの交際成功率が 26.9%であり、有意な差があった。結果として、組み合わせの一致度が低い組み合わせと比較して、組み合わせの一致度が高い組み合わせの交際成功率が高いと言える。

自分の価値観と、相手に求める価値観の組み合わせの一致度が交際成功率に影響を及ぼすことを論理的に説明するには社会交換理論（Thibaut & Kelly, 1959 など）が有効である。これは経済の交換理論に端を発したもので、どのような人間関係も代償（cost）を必要とし、それに見合った報酬（reward)が期待できる限り、人間は代償を支払うことに抵抗を感じないとする。両者のバランスが保てるという認識が続く限りは、多くの時間やお金、精神的重圧、自己犠牲などの「代償」を払う。人は報酬が代償を上回る分、その人間関係への満足度が高まり、それをできるだけ長く持続させたいと思う。そのためには、できるだけ代償を低く抑えるか、または報酬を高くする努力が必要となる。男女間において、自らの価値観と相手に求める価値観との類似の度合いが高いほど対人魅力を感じ取り、コミュニケーションを取る代償が低く済むため、交際成功確率が高くなると考えられる。ただし、婚活場面においては、それ以外にも代償や報酬が存在すると考えられるが、具体的な内容は不明である。

そのため、本研究においては、婚活サービスを利用する男女が交際をより進め、結婚に至った理由を実際に成功例に関わった（結婚に至った）男女にインタビューを行うことで、交際に進んだ人と進まなかった人の判断をどのようにしたかを明らかにし、関係性満足におけるコミュニケーション上の代償と報酬の具体的な内容を確認できるよう質問をする。

また、インタビューにより得られた知見は、質問紙を作成し、代償と報酬が交際成功率にどの程度関係性があるか定量調査を行い、妥当性の検討を行う。

参考文献

材木和雄(2010) 「結婚難の深化と結婚支援の必要性」社会文化論集.

大瀧友織(2016)「配偶者洗濯における男性の結婚支援サービス利用」大阪経大論集・第 67 巻 3 号, 69-82.

Duck, S. (1973). Interpersonal communication in developing acquaintance. In Gerald R. Miller (Ed.), Explorations in interpersonal communication (pp. 127-78). Beverly Hills, CA: Sage.

豊田秀樹・川端一光・松下信武（2005）「採用場面における EQ 検査の改善」教育心理学研究,53,456-466

佐々木研一・豊田秀樹(2011)「検査主体の求める人物像に合わせた尺度の個別設定を行える測定方法の試み」心理学研究,第 82 巻,第 4 号,379-384

Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). The social psychology of groups. New York: Wiley.

日本版コミュニケーション・オーディット指標開発

山口　生史（明治大学）
山口　麻衣（ルーテル学院大学）

本発表は、2012 年~2017 にかけて開発した介護施設用の日本版コミュニケーション・オーディット指標(質問票・質問項目)についての報告であるが、2016 年 6 月時点の中間報告はすでに 2 年前の JCA 年次大会の特別企画セッションで行っている(2016)。本発表は、その後現在までに質問項目がいかに修正されているかを報告するものである。

これまでの研究の経緯を、本研究で踏襲した Hikin(1998)の指標開発の 6 ステップに合わせて、以下に簡単にまとめておく。6 つのステップ（図 1）のうち、ステップ 5 を除き、ステップ 6 までを忠実に行ってきた(ステップ 6 は、現在も継続中)。まずインタビュー調査、フォーカスグループインタビュー調査を行い暫定的な質問項目を作成し、その質問票に対してプリテストとパイロットスタディを行い、本調査のための最初の質問項目が作られた（Hinkin のステップ 1)。それを修正完成させるために 2 時点のパネル調査が行われた（ステップ 2)。パネル調査 1 時点目の調査で得たデータに対して探索的因子分析（ステップ 3）を行い、2 時点目の調査で得たデータに対して確証的因子分析（ステップ 4）を行った。ステップ 4 までの経緯と結果はすでに論文として発表されている（2017a、2017b)。それらの分析結果に基づいて、質問票に多少の修正を加え、その質問票を利用して、3 度目の調査を行った（ステップ 6)。ただし 3 度目の調査はステップ 4 までの 2 時点パネル調査とは異なり、1 時点の横断的調査である。この調査で得たデータの分析結果に基づく修正箇所と修正された質問票の一部は報告しているが(2017a)、調査の手続きや方法、分析の詳細な結果、指標修正のプロセスに関しては学界で未報告である。本発表ではこのステップ 6（反復調査=3 度目の調査）で得たデータの分析結果の詳細を報告する。

表 1 . Hikin (1998)の指標開発の 6 ステップ

Step 1: Item Generation（質問項目の生成）、Step 2: Questionnaire Administration（質問票配布）
Step 3: Initial Item Reduction（初期項目削減）、Step 4: Confirmatory Factor Analysis（確証的因子分析）
Step 5: Convergent/Discriminant Validity（収斂・判別妥当性）、Step 6: Replication(反復調査)

3 度目の調査は、本研究プロジェクトの条件（対象業種の内訳など）に最も適したインターネット調査企業に業務委託して行われた。その企業が有するモニター会員 1277 人に対して 2016 年 5 月に質問票を配信し、介護施設に勤務する合計 377 人から回答を得た（有効回答回収率、29.5 %)。職種を、介護職、看護職、相談職（ケアマネージャー）に絞った。内訳は以下のとおりである：介護職 265 人、相談職 54 人、看護職 58 人。回答者の性別、平均年齢、職位は以下のとおりである：男性 127 人(33.7%)、女性 250 人(66.3%)； 41.8 歳（*SD* = 9.21）； 職位：副施設長 3 人(0.8%)、課長 3 人(0.8%)、 係長 5 人(1.3%)、 主任 33 人(8.8%)、 副主任 19 人(5.0%)、リーダー46 人(12.2%)、それ以外の一般職員 258 人(68.4%)。回答者の所属組織は、以下のとおりである：特別養護老人ホーム（従来型）65 人（17.2%）； 特別養護老人ホーム（ユニット型）: 78 人（20.7%）； 老人保健施設 91 人（24.1%）； 通所サービス 106 人（28.1%）；その他の介護施設 37 人（9.8%)。

データ分析は、探索的因子分析（EFA）と確証的因子分析（CFA）の両方を行った。EFA では、固有値が分散の 60%以上であること、因子負荷量が 0.40 以上であること、信頼係数(α)が 0.80 以上であることを基準として、項目削減を行いながら、上記基準値を満たす因子構造モデルとなるまで繰り返し分析を行った。その後、それらの基準値を満たしたモデルに対して、CFA を行い、データに最もよく適合する因子

構造のモデルを最終の構成変数（質問項目）として決定するという作業を行った。

ここでは、紙幅・字数制限のため、本研究の日本版組織コミュニケーション・オーディットのカテゴリーのうち一例として「チームコミュニケーション雰囲気」のみに関して CFA と EFA の結果とその質問項目の修正プロセスを報告する。上述した Hinkin のステップ 4、すなわち 2 時点のパネル調査後の分析を終えた段階では、この次元の質問項目は 7 項目であった。理論上 4 項目は「オープンコミュニケーション」、3 項目は「結束コミュニケーション」であった。3 度目の調査(ステップ 6)で得たデータに対する EFA の結果では、全 7 項目間で相関が高く一因子モデルとなった。しかし、固有値(分散の説明力)が 58%で、基準の 60%を超えなかった。そこで、共通性の低い 1 項目を削除したところ、信頼係数（α）は 0.002 しか改善しないものの、固有値（分散の説明力）が 58%から 62%となり基準値を超えた。しかし、その一因子モデルに対して CFA を行ったところ、その結果は表 2 に示す通り、(1)と(2)の一因子モデルは 7 項目でも 6 項目でもデータに適合しなかった。一方、理論に基づいて分類した、2 因子のモデル(3)と(4)は適合した。さらに(3)と(4)を比較すると、7 項目 2 因子モデルよりも 1 項目削除した 6 項目 2 因子モデルの方が、適合度（CFA および RMSEA の適合指標）がはるかに良かった。さらに、(4)の AIC の値が(3)の AIC の値よりもはるかに小さいことから、(4)のモデルが最もデータに適合しているといえる。

表 2. 確証的因子分析（CFA）の結果とモデルの比較

(1)7 項目一因子モデル：CFI= 0.937, RMSEA = 0.107, AIC = 6404.894(モデルがデータに不適合)
(2)6 項目一因子モデル：CFI= 0.829, RMSEA = 0.171, AIC = 6566.467 (モデルがデータに不適合)
(3)7 項目二因子モデル：CFI= 0.960, RMSEA = 0.089, AIC = 6368.337 (モデルはデータに適合)
(4)6 項目二因子モデル：CFI= 0.992, RMSEA = 0.047, AIC = 5408.721(モデルがデータに非常によく適合)

この結果、「チームコミュニケーション雰囲気 」は以下の通り 3 項目ずつの二次元とすることで決定した。

(A)オープンコミュニケーション(α＝0.86): ①普段の業務で意見を言いやすい、②リーダー上司に自由に意見を言いやすい、③会議などで、少数派でも発言しやすい;

(B) 結束コミュニケーション(α＝0.84): ①職員同士何でも本年で言い合える雰囲気がある、②職員同士協力して業務を進めている、③一緒に仕事をする中で、コミュニケーションを通じて結束力が高まっている。

本発表では、その他の指標(質問項目)の結果も報告する予定である。

本研究の調査は、2012～2017 年度 科学研究費補助金（基盤研究 B 24330177、研究代表者山口生史）の助成を受けて行われた。

引用文献

Hinkin, T., R. (1998). A brief tutorial on the development of measures for use in survey questionnaires. Organizational Research Methods, 1(1), 104-121.

山口生史(2017a)「高齢者福祉施設におけるコミュニケーション・オーディット研究：指標開発のプロセス」介護コミュニケーション研究会（編）研究報告書『介護施設における職員間コミュニケーション：コミュニケーションの効果とコミュニケーションがもたらす問題の見える化と自覚化のための指標開発と分析』（pp. 4-20）文部科学省研究助成（基盤研究(B) 24330177、平成 24 年-28 年度　研究代表者：山口生史）

Yamaguchi, I (2017b). Instruments for Organizational Communication Assessment for Japanese Care Facilities. Corporate Communication: An International Journal, 22(4), 471-485.

山口生史・清宮徹・山口麻衣・福山和女・藤井薫・高橋徹・大倉美成子・池田章子・照井秀子（2016）「介護施設におけるコミュニケーション・オーディット研究－高齢者福祉施設職員間コミュニケーションの指標開発－」、日本コミュニケーション学会第 46 回年次大会特別企画セッション発表（西南学院大学）

歴史研究とレトリック研究の交錯点を探る

―『狂気の歴史』を読む―

レトリック研究者の多くが『監獄の誕生』や『性の歴史』を取り上げてフーコーの権力論や生政治といった概念に注目する一方、最初の著作である『狂気の歴史』やその内容については論じてこなかった。昨年の『言葉と物』に焦点をあてたパネルに引き続き、今回のパネルは、こうして忘れられてきた、あるいは（無意識に）避けられてきた『狂気の歴史』を読み、レトリック研究に新たな展望を切り開くことを目的とする。

『狂気の歴史』でフーコーが論じたのは、狂気や監禁の存在理由や、それらが社会にもたらした効果や結果を問うことではなかった。むしろ、『狂気の歴史』は、心理学が誕生する条件を狂気や監禁といった記号が特定の意味を持つ実践の変容過程として詳細に描き出している。これは、コミュニケーション研究が扱う社会構造や文化、もしくは知の枠組み（エピステーメー）を論じる際に、記号や表象が問い直すべき領域であることを示唆している。本パネルは記号・表象を出発点とした歴史研究からの理論構築の可能性を模索する。

漂流する狂気

是澤　克哉（広島修道大学）

ヨーロッパでは、狂人たちが船で放浪する生活を営んでいたことが古くから伝えられている。自在の航路を辿れると同時に、あらゆることから絶縁した脱出できない船に閉じ込められた狂人達は、生と死の「関門」という特権的な位置を占め、そこを「通過する地点で取り押さえられ」監禁される「都市の城門」（フーコー, 1975: 28）という境界にいた。しかし、15 世紀頃に突如として「狂気」を主題とした文芸作品が数多く現れてくる。フーコーは、この突然出現した「狂気」の表象に着目し、狂人達を乗せた象徴的な船である「阿呆船」を『狂気の歴史』の最初のテーマとして取り上げる。外部として構成され生から遠ざけられていた死が、ペストや宗教戦争などと共に終末論として目前に立ち現れ、身近に迫る死が遍在し、人々の不安を煽る。同時に、「馬鹿」や「間抜け」など、様々な類型の阿呆の表象が狂気として産出されることとなる。フーコーはルネサンス期の狂気をボッシュやブラント等が描く「阿呆船」の描写に見出し、当時の狂気が「＜狂人の船＞のシルエット」（フーコー, p. 30）としてどのように表象されたのか、その存在を歴史的に浮き上がらせることを試みた。

本発表では、これらのフーコーの分析に基づき、「イメージ」と「言説」の関係に注目し、狂気の悲劇的経験と批判的意識を中心に紐解いていきたい。フーコーによると、当時の阿呆船の表象は、悲劇的要素と批判的要素の両義性を帯びていた。ボッシュやブラントが描く終末論的凶暴さのイメージと言説の道徳的雄弁さを兼ね備えた阿呆船の形象は二重化されている。その両義的な表象の歴史的過程を批判的に分析し、レトリック研究との交差する場を探していきたい。

古典時代における装置としての監禁

松島　綾（立命館大学）

『狂気の歴史』において、ミシェル・フーコーは監禁が 17 世紀に固有の制度上の産物であると論じている。中世期の癩者を監禁した癩施療院は医学的意味と呪われた空間という意味を持ち合わせていた。しかし、17 世紀半ばから 18 世紀末までの 150 年間の古典主義時代には、監禁という表象＝記号には様々な意味作用が付与され始める。この監禁をめぐる新たな記号の編成は「総体としての古典主義世界に本質的なある種の構造に関わっているに違いない」（フーコー, 1975: 72）。狂気にそれまで与えられていた宗教的理解が一般施療院での監禁という慣行に意味付けをすることで、「理性対非理性」「秩序対無秩序」という図式を通して社会的・道徳的・倫理的な理解に変わっていく。フーコーはこの構造の変化を考察し、狂気に対する新たな経験や知覚が生まれる様式を歴史

的に明らかにしている。

この構造を論じる際に明らかにしておかなければならないフーコーの論点は、狂気に対する知覚が監禁施設の設置に繋がったのではなく、監禁という行為そのものに対する記号の意味付けが狂気を理性の外部として構築したという点にある。すなわち、監禁という社会制度は実際には記号や言葉として表象される、狂気を閉じ込める理由付けを可能にした統治の装置なのである。ここに、後期フーコーの「統治性」にみられる装置の原型が、古典主義時代の監禁の表象に既に見られる。

この報告では古典主義時代の監禁を装置として捉え、単なる意味付けに還元不可能な外部としての狂気を生成する表象の構造をいかにフーコーが論じていたのかを明らかにすることで、監禁がフーコーのいう「制度上の産物」、つまり社会学的な制度の問題ではなく、文化と表象を核心とするコミュニケーションやレトリック研究の問題として把握するべき必要性を論じてみたい。そして、このフーコー自身が論じた史的に埋め込まれた監禁という実例が実証する装置という概念がもつレトリック研究への貢献の潜在性を明らかにしてみたい。

狂気と理性の共存関係とレトリック
―『狂気の歴史』における主体と／もしくは客体としての狂気―

宮脇　かおり（立命館大学）

フーコーによると、近代（18 世紀末～）にはルネサンス期に見られた狂人専用の監禁が復活しはじめた(フーコー, 1975: 408)。そこでは、狂人が閉じ込めるに値するかの判断は、監禁によって可能となった詳細な観察によってなされていた。ルネサンス期には「難解で閉ざされた知」、古典主義時代には「理性の外にあり秩序を乱すもの」だった狂気は、近代には観察日記によって「伝達可能なもの」となった。狂気を医学的に観察することにより、狂気は理論的推論を介してのみ理解される（精神医学の）客体となった(フーコー, p.465)。さらに（理性的な）観察結果は、狂気の監禁を正当化する論拠となり、客体としての狂気は監禁を行う権力の象徴となった(フーコー, p.423)。

ここで重要なのが、なぜ一連の狂気を巡る変化が起きたのかについて、フーコーは明確な原因を示すことを避けている点である。それは、人間の行為や言葉ではコントロール出来ない大きな流れ（後の彼の言葉で言うエピステーメー）の存在を示唆しているように読み取れる。ビーセッカー(Biesecker, 1992)はレトリック研究が陥る人間中心主義をフーコーが批判した点をここに看破していると言える。フーコーにとっての研究対象は、人間や人間による行為ではなく、その「大きな流れ」であり、それを捉える方法が歴史研究（知の考古学）となる。本報告では、ビーセッカーの議論を更に展開し、この歴史研究とレトリック研究が交差する記号こそが、その「大きな流れ」が現れ、変容し得る場であることを論じたい。

さらに本報告では、監禁以外の狂気の居場所とされた見世物小屋に着目し、近代ヨーロッパにおける見世物小屋をめぐる言説を分析する。分析の中で（身体的・精神的）狂気と理性との奇妙な共存関係や娯楽として消費される狂気を描き出し、狂気と身体の関係性から狂気の客体化を考察してみたい。

本パネルは表象や記号としてコード化される（あるいはそれ以前の）「狂気」という対象・主題への関心がいかに生まれ、それを知の対象として統治の経済に組み込もうとする心理学や臨床の学問がどのような形で芽吹き始め、どのように歴史的に変遷していったのかを考察していく。

参考文献

フーコー・M. (1975). 『狂気の歴史-古典主義時代における-』田村俶訳　新潮社

Biesecker, B. (1992). Michel Foucault and the question of rhetoric. *Philosophy and Rhetoric, 25*(4). 351-364.

〈コミュニケーション教育研究会共催パネル〉

ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る　第 2 弾

司会・パネリスト：五十嵐紀子（新潟医療福祉大学）
パネリスト：池田理知子（福岡女学院大学）
石橋　嘉一（青森中央学院大学）
塙　幸枝　（神田外語大学）

コミュニケーション科目がどのようなコンテンツを扱い、どのような問いかけや方法で教えられているかについて情報・意見交換をする機会は、支部大会レベルではシラバスワークショップ等の企画により回数は少ないが実施され、好評を得てきた。他の会員がどのような授業実践を具体的に行っていて、学生はどのような反応を見せているのか、また授業を行う中での悩みなどを情報交換し、議論することは参加者にとって、自らの授業実践を振り返り、新たなアイデアを得られたり、授業のあり方を再考するための有益な時間であったからだろう。しかし、JCA 年次大会において、そのような機会は定期的に提供されてはこなかった。コミュニケーション学プロパー間の意見交換はこれからのコミュニケーション教育のために必要であることはもちろんであるが、そうではない一般大会参加者に授業実践におけるヒントを提供する機会を持つことは、JCA の社会的使命としても重要であろう。特に、医療・福祉系の大学においてコミュニケーション教育はますます重要視されているが、患者や利用者との円滑なコミュニケーションをはかるためのスキル習得に留まる傾向は依然として強い。しかし、様々な個別の背景を抱えた患者や利用者の支援には、多くの誤解や葛藤なども含めて目を向けていかねばならない現実もあり、スキルの習得に限界を感じて始めている医療・福祉分野の実践者も少なくない。

ヘルスコミュニケーションをコミュニケーション教育の中で扱うということは、医療・福祉分野を目指す学生教育にとどまらない。人が生涯を通して向き合わなければならないヘルス（健康）をテーマにコミュニケーションを考えることは、人を理解し、我々が生きる社会について考えることになる。我々が当然視している様々な考え方が多くのステレオタイプに支配され、それに無自覚に従ってしまっていることに目を向けようとすることは、コミュニケーション教育の中では最も重要な視点のひとつである。病や障害を持っている人々、性的マイノリティにとって生きづらい社会を作るのに自分も加担しているかもしれないという視点への気づきを得ることは、医療・福祉分野に従事する人々だけの問題ではない。各々が生涯を通じて、病や障害をいつ負うかわからないし、誰にでも訪れる老いによって自分が常にマジョリティであり続けることはおそらく不可能で、社会の変化の中で当然視されてきたことに疑問を持たざるを得ない局面もあるだろう。ヘルスコミュニケーションを学ぶことは、日常を見直し、社会の変化とともにあるコミュニケーションを学ぶことに他ならない。

本パネルは、2016 年の JCA 第 47 回年次大会における「ヘルスコミュニケーション教育の可能性を探る」の第 2 弾として開催するものである。『よくわかるヘルスコミュニケーション』（ミネルヴァ書房，2016）の編集・執筆に携わり、さらに授業でこの本をテキストとして使用した 4 人がパネリストとして話題提供をし、参加者とともにヘルスコミュニケーションをコミュニケーション教育として扱う意義と可能性をさらに探っていく。

それぞれのパネリストが今回のパネルで話題提供、及び提起したい課題は、以下のとおりである。

五十嵐からは、医療福祉系大学の選択科目である「対人コミュニケーション論」で『よくわかるヘルスコミュニケーション』をテキストとして使用した実践報告をする。専門領域混合クラスで行ったが、それぞれの専門領域での学びが進むほど、言葉遣いだけでなく考え方にも大きな隔たりが専門領域間にあることに気づいた学生も少なくない。また、個人的な経験を語り出す学生も多く、家族などプライベートな関係性と専門職としての理想のコミュニケーション観との葛藤についても話題となった。『よくわかるヘルスコミュニケーション』で扱いきれなかった家族という距離の近さからくる葛藤についても問題提起してみたい。

石橋からは、看護学部初年次必修科目である「対人コミュニケーション」の授業実践事例をもとに、ヘルスコミュニケーション教育の意義と可能性について検討し、具体的な教授モデルを提案する。具体的には、近代科学的思考、決定論・確率論に重きがおかれた他授業群の中において、ヘルスコミュニケーション教育であるからこそ切り込めた学習内容を整理し、また、医療・看護の専門知識・技術（観）に関心が高い学習者からの授業評価も検討し、教授モデルを提示する。

塙からは、医療・福祉分野を専門としない学部・学科における当書の教科書使用の事例をあげ、コミュニケーション論やメディア論といった分野におけるヘルスコミュニケーション関連項目の位置づけを検討する。左記の教育実践事例をつうじて、ヘルスコミュニケーションを独立した領域として提示するのではなく、コミュニケーションという広い視座のなかで、また、文化・身体・テクノロジーといった様々なキーワードとの関連のなかで捉えることの意義と難しさについて議論する。

池田からは、国際基督教大学で 2017 年度に教えた少人数クラスでの実践報告を中心に、ヘルスコミュニケーションを一般の大学で教えることの意味について検討する。ゼミ形式で進められた当該授業では、学生からさまざまな意見があがった。なかでも特筆すべきは、「ヘルス」に対する知識を増やせば「リテラシー」があがるという前提のもとで語られる「ヘルス・リテラシー」への疑問であった。一般の大学でヘルスコミュニケーションについて教えるうえで重要なのは、身近な生活のレベルで「ヘルス」について考えさせることである。そのためには、「ヘルス・リテラシー」とは何かを検討することは避けて通れない課題ではないだろうか。

参考文献

池田理知子・五十嵐紀子編（2016）『よくわかるヘルスコミュニケーション』ミネルヴァ書房

北朝鮮と対話

—政治外交に見る対話の意味と対話言説の特徴—

小坂　貴志（神田外語大学）

本研究では、対話論の観点から、北朝鮮を巡る一連の動きの中で世界の政治家が使用する「対話」の言葉の意味を分析し、それを踏まえて対話言説の特徴を同定することを目的とする。「対話」という言葉と対話概念は私たちの社会に広く蔓延してはいるものの、「対話」という言葉が一体どのような意味を持って使われ、また、対話にはどのような意味的概念が含有されるのかについては振り返られることが極めて少なくなっている。対話の概念的考察は進展する兆しがある一方で、例外として Carbaugh *et al.* （2011）を除き、「対話」の言葉そのものの意味についての考察がさほど伴っていないことが指摘できる。

「対話」の言葉そのものの意味についての分析調査をさらに深めるべく、筆者は、新聞・テレビ・インターネットなどのメディアによって伝えられるニュースに引用される「対話」の言葉を拾い出し、各国の立ち位置や「対話」の言葉が発話された文脈を考慮に入れつつ「対話」の言葉の意味の解釈をおこなってきた（小坂、2017）が、「対話」の言葉の意味と対話を巡る外交的状況は扱う事象によって様々であり、さらに、対話論の知見に基づいて対話言説の特徴に対する再解釈が求められている。

上記のような対話研究を巡る環境の中で、2017 年は北朝鮮の核・ミサイル開発の加速化とミサイル発射に世界各国が揺り動かされた年となった。2018 年の本抄録原稿執筆時点では、アメリカを中心にした対北朝鮮への圧力姿勢を背景にし、2 月開催の平昌五輪の恩恵にもあずかり、南北間関係に一応の融和ムードが漂ってはいる一方で、五輪閉幕直後に予定されている米韓軍事合同演習の実施をはじめ、特にアメリカが率先して継続した圧力姿勢を示すなど、朝鮮半島情勢は落ち着きを取り戻す気配を見せてはいない。

本研究では、Carbaugh *et al.* （2011）の分析手順に基づき「対話」の言葉を調査分析した結果、先行研究がとりあげている（Macllennan, 2011）ように、対話とは矛盾をはらむ概念であることが確認できた。

矛盾を圧力と対話で表明される外交の立場という二律背反で考えると、対立状態にある各国の立ち位置が矛盾そのものである。世界各国が対北朝鮮への対応を「圧力」か「対話」のいずれをとるかで表明していることは報道を通した発表でも明らかであり、世界各国の対応を巡るメディアによる分析でも、「圧力」か「対話」かで世界地図を描くことができ（岩田明子 NHK 解説委員 2017 年 9 月 24 日放映 NHK『世界のいま』）、北朝鮮に融和的な姿勢を見せる中国、ロシア、韓国などは対話路線、アメリカ、日本などは圧力路線を歩んでいる。対話に対して見え隠れする圧力が、まさに対話を矛盾状況に追いやっている形をとっている。

北朝鮮を巡る「対話」の矛盾では、アメリカのトランプ政権内の要人が対話を通して示す対北朝鮮の方針を巡って矛盾が露呈することが明らかとなってきている。トランプ大統領、ペンス副大統領、ティラーソン国務長官、マティス国防長官らがこれまで表明してきた方針は、それぞれを否定、逆行する方針で頻繁に塗り替えられ、何が真の方針なのかが不明瞭になる場面が多々見られる。このような矛盾はトランプ政権に特有のものとみなすことができるだろうが、北朝鮮問題では特に、そしてここが重要となるが、「対話」の使用や対話路線か圧力路線かを巡る方針の発信にあたっては政権内の矛盾を露呈させる原因となる。

政策転換という観点から矛盾を考察する。韓国の文在寅政権の対北朝鮮方針に見られるように、大統領就任以前の昔から文氏は北朝鮮との融和を図り、朝鮮半島を統一するとの野望があった。大統領に就任し

てからも、文氏には北朝鮮とは対話路線をとる旨の公約を提示し、事あるごとに北朝鮮に対して対話を呼びかけ、北朝鮮によって無視され続けてきた。ところが、アメリカと日本からの圧力路線切り替え要請や国連安全保障理事会の決議である経済制裁措置など、全体の動きの波に押され圧力路線への切り替えを迫られ、文大統領本人も対話路線を諦めたかに見えた矢先のこと、2018 年正月におこなわれた金正恩朝鮮労働党委員長による「新年の辞」にて韓国に対して対話が提案された途端、文在寅大統領はこの提案に飛びつく形で、平昌五輪参加がきっかけとなり南北対話が実現する運びとなった。本抄録原稿を執筆している時点では平昌五輪がまさに開催中なので今後の動きは予想がつかないものの、対話→圧力→対話という文在寅大統領の方向転換に対して、アメリカと日本は北朝鮮に向け圧力路線で臨むよう韓国に引き続き要請をおこなっている。

以上、対話概念の最大の特徴である矛盾から対話を考察したが、危機的状況にある世界関係を戦争へ至らないよう対話が世界を守っている様子が理解できる。「対話は解決策ではない」（トランプ大統領）、「対話のための対話であってはならない」（安倍首相）など世界の要人は対話の無力さを糾弾することがこれまであったのだが、果たして対話は効力に欠ける外交戦略なのだろうか。対話は綺麗事なのだろうか（細谷、2007）。トランプ大統領や安倍首相によって使われている「対話」は「直接対話」を指すことが明らかであり、ここではたとえ金正恩朝鮮労働党委員長と世界の要人が同じテーブルに着いたとしても何も期待できず、特に、クリントン大統領、ブッシュ大統領と過去のアメリカ大統領が二度に渡っておこなった対話が何らの成果も生みださなかったことをトランプ大統領が批判し（読売新聞 2018 年 9 月 8 日）、同じような過ちを繰り返さないことに精力を注ぐ一方で、国連の決議案やトランプ大統領のツイッター発言に対して、北朝鮮国営メディアを介して反論をおこなったり、ロケットを発射したりなど、間接的な対話がとりおこなわれ、怒りの爆発を受け止めるための緩衝役を対話が担っている。このように、マクロの視点から枠組みとしての対話を考察すると、「対話」の言葉が各国要人によって戦略的に使われている様子を確認することができる。

本研究では、政治家の言説やそれらを引用したニュース報道に登場する「対話」の言葉の使用を分析しているが、今後は、ニュース報道の対話使用に関する政策やニュース報道以外の「対話」の言葉を使用する際の意味について、情報源に直接確認するなど、「対話」の言葉の意味の幅を広げるなどの工夫を凝らしていく必要がある。また、多言語で使用される「対話」の言葉の等価性についてはすでに Carbaugh *et al.* (2011) で考察されており、北朝鮮を巡る「対話」も英語の dialogue との等価性が確認されてはいるが、ペンス米副大統領の “talking” に対して「対話」の訳があてがわれる（読売新聞 2018 年 2 月 15 日）など、用語の等価性について注意が必要と思われる使用例があるため、再度、多言語使用の状況における「対話」の用語の等価性についても考察が必要である。

参考文献

Carbaugh, D., Nuciforo, E., V., Saito, M., & Shin, D. (2011). “Dialogue” in cross-cultural perspective: Japanese, Korean, and Russian discourses. *Journal of International and Intercultural Communication, 4(2)*, pp.87-108.

MacLennan, J. (2011). “To build a beautiful dialogue”: capoeira as contradiction, *Journal of International and Intercultural Communication, 4(2)*, pp.146-162.

小坂貴志（2017）『現代対話学入門』明石書店。

細谷雄一（2007）『外交―多文化時代の対話と交渉』有斐閣。

読売新聞 2018 年 9 月 8 日夕刊 4 版 1。

読売新聞 2018 年 2 月 15 日「『北との対話 交渉とは違う』ペンス米副大統領講演」4 版 3。

Civil(ity)概念を再訪する

－日本の政治コミュニケーションのために－

田島　慎朗（神田外語大学）

米国における相次ぐ学校での銃乱射事件や保守的な政治リーダーの台頭、リベラリズムの限界が論じられるなか、Civility の概念はコミュニケーション研究者の間だけでなく、政治言説やニュースの中でも注目を集めている。日本語の直訳が困難なこの言葉は、人単位での市民のあり方を規定するだけでなく、特定の文化・集団の規範の中で機能したり、エチケットとしての適切なふるまいを指したりと、多義的な使い方をされる。

ここで考察するのは、この語が何を意味し、コミュニケーション／レトリック戦略としてどのようなときにどう使われ、それが民主主義と自由という概念、そして政治演説やデモ、路上パフォーマンスといった政治行動にどうかかわりうるかということである。特に、米国のコミュニケーション研究が直接的・間接的に civil(ity) を扱った学術的考察から知見を得て、それをどう日本の政治文脈に位置付けることが出来るかという点に関心を示す。

米国のコミュニケーション研究では、例えば Dana L. Cloud らが Civility の概念の横行は政治的急進的な学者＝活動家の自由を奪うものだと論じている（Cloud, 2015；Young, Battaglia & Cloud, 2010）。Cloud らが主張するのは、共同体市民の民主的権利としての権利が「uncivil だ」と名指されることによって脅かされるという学者＝活動家の立場からの現実である。

政治的主張の一部がこのように非難される理由の一つに、一般的に使われる civil(ity)の概念自体のなかに礼儀正しさやエチケットといった考えが内包されていることがある。Grice & Skinner（2013）がパブリック・スピーキングの教科書で述べるように「他者に対する根本的な敬意を払い、同調的で生産的な関係を築けるような言語的・非言語的ふるまい」も civility に含まれうるのである（p.33）。コミュニケーション教育の現場でも uncivil なふるまいは矯正されるべしとする主張と、そのための教育実践法も最近掲載された（Pawlowski, 2017）。こういったふるまいに欠ける（と映る）行為は主張のいかんにかかわらず排除される動きが政治の現場で起きていることに、Cloud らは懸念を示しているのである。

ただ、civility の概念そのものに注意深く考察を重ねようとするものは、より複雑な意味の関係性をこの概念に見て取る。これらの論考の中で、共通の理解として挙げられることがもっとも多いのが他者への認識と敬意である。個人の尊厳に対する十分な配慮を高めようとする論考（例えば、Foss & Griffin, 1995）をひきつぐこれらの議論は、対人的な場面であれ、集団・政治的な場面であれ、礼儀正しさを保つことを civility の概念の重要な部分であると考える。例えば Stuckey & O'Rourke（2014）の論じる"political friendship"としての civility は、意見交換それ自体に純粋な動機をもって、そのために寛容さだけでなく敬意をもって臨むことを条件とする。ただし、Stuckey & O'Rourke（2014）はこの概念に思想統合的な方向（toward integration）へ向かう動きを含めるべきではなく、あくまで他者を共同体の中に組み入れる（toward incorporation）かどうかをもってこの言葉を再定義すべきとしている。つまり、少数派の声や一般から見て不人気であったり奇異に映ったりする意見を「私たち」と違うので「礼節に欠く」と排除するのは間違っている、という意見である。権力概念を援用しながら描き出す Stuckey & O'Rourke（2014）の civil(ity)のビジョンは「デモや政治的主張で uncivil と批判されるものの中には、被抑圧者にとっては civil な行為もあるのではないか」という提案を含むものである。

また、Rood（2013）は上記二つの civility 概念をそれぞれ confrontationalist のもの（Cloud, 2015；Young, Battaglia & Cloud, 2010）と invitational なもの（Foss & Griffin, 1995; Grice & Skinner, 2013; Pawlowski,

2017）とに分け、この二つの矛盾と対立を乗り越えるために、古典レトリックの原理に基づいて常に文脈的に civility 概念を再定義すべきであると論じている。また、Spencer, Tyahur & Jackson（2016）は、Cloud らが論じるように、言論の自由への制約／に対する恐怖として civility を扱うのではなく、言論の自由への条件として理解するよう提唱する。

以上を含む civility の知見と論争が、日本のコミュニケーション研究――特に、広義の政治にまつわるコミュニケーションの分野――にどのような示唆を与えうるのかを問うのが今発表の目的である。

発表では、まず米国のコミュニケーション研究でなされた civil(ity)の議論を整理し、考察する。次に、日本で civility に相当しうる概念がどう論じられてきたかを、コミュニケーション学と諸関連学問、特に教育学と教育社会学の文献から読みといていく（例えば、川口、1999；小玉、2017；藤巻、2013）。米国の civil(ity)に関する学術的論考を日本の文脈に当てはめることで、日本における civil(ity)の議論を興していくことがここでの目標である。最後に、日本のデモや政治パフォーマンス実践に対する反応のいくつかをみていくことで、前節の内容を検証しながら、日本における政治実践の可能性と限界を見ていくとともに、米国で civil(ity)概念のもとに論じられてきたいくつかのアイディアの日本における有用性を論じる。

引用文献

川口幸宏（1999）『モラル・エデュケーション』八千代出版。

小玉重雄（2017）「民主的市民の育成と教育カリキュラム」『学びとカリキュラム（岩波講座　教育　変革への展望　第 5 巻）』佐藤学他編、岩波書店。185-208 ページ。

藤巻光浩（2013）「これからの市民社会とレトリック教育」『スピーチコミュニケーション教育』26：49-56 ページ。

Bone, J. E., Griffin, C. L., & Scholz, T. M. L. (2008). Beyond traditional conceptualizations of rhetoric: Invitational rhetoric and a move toward civility. *Western Journal of Communication, 17*(4), 711-736.

Cloud, D. L. (2015). “Civility” as a Threat to Academic Freedom. *First Amendment Studies, 49*(1), 13-17.

Foss, S. A., & Griffin, C. L. (1995). Beyond persuasion: A proposal for an invitational rhetoric. *Communication Monographs, 62*, 2-18.

Grice, G. L., & Skinner, J. F. (2013). *Mastering public speaking* (8th ed.). Upper Saddle River, NJ: Pearson Education.

Pawlowski, D. R. (2017). Communication civility codes: Positive communication through the students’ eyes. *Communication Teacher, 31*(1), 6-10.

Rood, C. (2014). “Moves” toward Rhetorical Civility. *Pedagogy, 14*(3), 395-415.

Spencer, L. G., Tyahur, P. M., & Jackson, J. A. (2016). Civility and academic freedom: Extending the conversation. *Journal of Contemporary Rhetoric, 6*(3/4), 50-61.

Stuckey, M. E., & O’Rourke, S. P. (2014). Civility, democracy, and national politics. *Rhetoric & Public Affairs, 17*(4), 711-736.

Young, A. M., Battaglia, A., & Cloud, D. L. (2010). (Un)Disciplining the scholar activist: Policing the boundaries of political engagement. *Quarterly Journal of Speech, 96*, 427-435.

自由とコミュニケーションについての一考察

平野　順也（熊本大学）

> みんな似たもの同士でなきゃいけない。憲法とは違って、人間は自由平等にうまれついているわけじゃないが、結局みんな平等にさせられるんだ。誰もがほかの人をかたどって造られるから、誰もかれも幸福なんだ。人がくすんでしまうような山はない、人の値打ちをこうと決めつける山もない。だからこそさ！となりの家に本が一冊あれば、それは弾をこめた鉄砲があるのと同じことなんだ。そんなものは焼き払え（p.99）。
>
> ブラッドベリ、『華氏 451 度』

１．はじめに

自由は民主主義の根幹である。自由主義と共同体主義との間では、自由の位置付けについての論争が活発に行われてきた。自由は社会の多様性を受容するためにも重要であるが、差別的憎悪表現を例にするまでもなく、自由の過信が問題を生じされることもまた事実だ。他人に対する憎悪に満ちた過激な表現が法によって規制されていることからも、自由は他人を傷つけることのない範囲で行使できる個人に与えられた権利であること理解することができるだろう。しかし、自由がもたらす問題は、他人への害だけではない。

２．思考犯罪と弾圧

オーウェルが『1984 年』で表現した統制された独裁社会では、自由な思考が秩序を乱すという理由から「思考犯罪」と呼ばれている。そして、「思考犯罪」は「他のすべての罪を包摂する本質的な罪」（p.32）であると記されている。この凶悪犯罪を取り締まるために「思考警察」と呼ばれる秘密警察が人びとを徹底して監視している。真理省と呼ばれる行政機関が娯楽、教育、そして報道を管理し、新聞、映画、教科書、テレビ番組、劇、小説、論文、銅像やスローガンまでも提供しているのも、人びとの思考の全てを管理するためだ。また、この社会では「ニュースピーク」という言語が使用されているが、党のイデオロギー強化のために新語が創り出されることはない。多くの単語を消去し、市民の思考を単純するために改定が続けられているのだ。独裁制管理下において自由な思考が強奪されるさまを描くことによって、オーウェルは逆説的に自由な思考がもつ革命的な可能性を、そしてその価値を読者に伝えているのだ。表現の自由が保障された社会の読者はこの物語を、自由の重要性についての教訓として読み解くことができるだろう。しかし、現代社会では、オーウェルが描写した独裁制の暴力的な統制とは全く異なる方法—すなわち、自由な思考への弾圧—によって行われているのではないか。

思考や表現の自由とそれを弾圧する力の関係は、ブラッドベリの『華氏 451 度』のテーマでもある。映像や音声は人びとに情報を提供することができるが、書物からは叡智を習得することができる。そして被統治者がもつ叡智は統治者にとっては脅威となる。そのため書物の所有は禁止され、発見された書物は次々と焚書されてしまう。しかし現代社会では、ここでもオーウェルと同様にブラッドベリが批判した暴力的な焚書という行為とは異なる方法によって、思考や書物の排斥が実行されている指摘することができる。

３．個人の際限なき欲望

では、現代社会では、思考に対しどのような統制が行われているのか。ランシエールのことばを借りるなら、それは「現代の個人の際限なき欲望」（p.6）によって行われている、と言うことができるだろう。より正確に表

現するならば、表現の自由が保障された現代社会では、思考に対して「弾圧」といった暴力は存在することはない。「個人の際限なき欲望」である自由そのものによって、思考が「忘却」されるのだ。

中島は、社会に溢れることばの問題を指摘している。街では広告だけではなく、標語、スローガン、注意事項が記された看板、垂れ幕、張り紙が散見される。まるで広告が商品を勧めるように、看板や垂れ幕が特定の価値や思想を人びとに「売る」のだ。まるで、記されたメッセージが人びとにとって重要であるように。もちろん、人びとはそれらの殆どに注意を払わない。街を覆うようにして存在することばからは、ことばの価値や効果ではなく、ただ多くの自由な人びとが自分たちの信じる主義主張を無秩序に発信している状態が確認できるだけだ。そして、中島はことばの氾濫はことばの力を理解せず、判断力も欠如した人びとを量産すると述べる。そして、中島はこのような人びとの症状を「無思考症」(p.97) と呼ぶ。もはや思考を犯罪として扱う必要はない。「個人の際限なき欲望」が渦巻き、自由が盲信されるような状況では、思考は機能停止しているようなものだ。

4．自由という脅威

トドロフは、自由について次のように述べている。彼は、これまで自由は民主主義の根本的な価値だと捉えていた。しかし、使用する方法によっては、自由は民主主義の存在を揺らがせる脅威でもあるということに気付いたという。そして、「今日、民主主義にのしかかっている脅威は、外部から、つまり公然とその敵を自称する者たちの側からやって来るのではなく、むしろ内部から、つまり民主主義の価値観を守ると主張するイデオロギー、運動、または策動から生じる」(p.8) のだ、と論じる。たとえば、富を独占する 1%の富裕層に対し行われたオキュパイ・ウォールストリートであっても、グローバル化という文脈で紐解けば、世界的には抗議する 99%の人びとの多くもまた富裕層に属しているという事実は否定できない。自由や権利を盾に富を独占する人びとへの批判と同様のものが、共存や平等の価値を掲げ抗議する人びとにも向けることができるのだ。しかし、このような矛盾が排除されることにより、自由と平等が約束された社会の実現を目的とした聖戦という単純な物語が構築され、グローバル化の複雑な諸相や問題にまで議論が進むことはない。すなわち、富みに恵まれない他国にとって、オキュパイ・ウォールストリートは富を過剰に持つ者と、富をある程度持つ者の双方に存在する「際限なき欲望」の諍いでしかない可能性もあるのだ。

自由が過度に信じられるようになり、それが「個人の際限なき欲望」に従って使用される現代社会でのコミュニケーション活動には混乱が確認することができる。共生を可能にする自由によって、他人の排除が行われているだけではなく、我われ自身の思考ですら停止させられてしまっているのだ。本発表では、思考、権利、共生といった鍵語を中心に、脅威としての自由を分析し、自由が現代社会のコミュニケーションに与える影響について考察する。

引 用 文 献

オーウェル、G（2009）（高橋和久・訳）『1984 年〔新訳版〕』早川書房。
トロロフ、T（2016）（大谷尚文・訳）『民主主義の大いなる敵』みすず書房。
中島義道（1997）『＜対話＞のない社会：思いやりと優しさが圧殺するもの』PHP 研究所。
ブラッドベリ、R（2014）（伊藤典夫・訳）『華氏 451 度〔新訳版〕』早川書房。
ランシエール、J（2008）（松葉祥一・訳）『民主主義への憎悪』インスクリプト。

グッドナイトの論争分析の一般化に関する一考察

―遺伝子組換え作物に関する論争を発端として―

山本　輝太郎（明治大学情報コミュニケーション研究科）

1. 研究の背景

本発表は、議論学者のトーマス・G・グッドナイト（Thomas G. Goodnight）の提唱する社会論争分析の枠組みについて考察し、科学・技術と社会の問題に関する論争分析の手法として一般化を目指すものである。

グッドナイトは、我々の社会で議論や論争が行われる領域を次の三つに分類する（Goodnight, 1982）。それは、私的領域（Personal sphere）、専門的領域（Technical sphere）、公的領域（Public sphere）である。私的領域とは、一般市民が会話形式で進行させる議論の領域であり、そこで話されるテーマは日常生活に隣接している。専門的領域は、いわゆる専門家集団における議論の領域である。学会や政府の専門家委員会などの議論がこれにあたる。そして公的領域とは、この両者の中間に位置する領域である。専門的領域ほどではないにしろフォーマルな様式が求められるが、市民、知識人、関係者、マスコミ、政治家に至るまでが自身の主張を展開し、説得的な手段を用いて人々に共通の社会的な関心事に対して議論を行う領域である（鈴木、2009）。グッドナイトの理論は、このような「議論の領域（argument sphere）」に従った分類の中で[1]、公的領域における議論を社会論争として分析する。

社会論争分析では、論争的な状況で対立する主張の背景にある省略三段論法（enthymeme）の推論に対する批判作用を明らかにすることができる。そして、省略三段論法が省略しているものを批判するコミュニケーション作用が、論争のなかでどのように用いられているかを分析することも可能である。省略三段論法が省略しているものを「暗黙の前提」とすると、社会論争分析とはつまり、論争的な状況における暗黙の前提の齟齬について分析可能な理論であるといえる。

実際、Olson & Goodnight（1991）では、米国内で起きた毛皮使用の是非に関する論争を分析している。そこでは「毛皮産業は残酷であるからやめるべきだ」との否定論の主張に対し、肯定論は「食用の動物と同じように、毛皮としての動物はあらかじめ決まっており、痛みのない安楽死が行われる」との反論を行う。「動物を殺すことは残酷である」という否定論の暗黙の前提を攻撃し、無意識に処理される前提の不確かさを指摘することで肯定論の主張の正当性が訴えられているのである。

発表者は、このような社会論争分析は科学・技術と社会の問題に関する分析手法として特に有効なのではないか、と考えている。

2. 遺伝子組換え作物論争

そこで本稿に先立ち発表者は、このグッドナイトの枠組みに従って我が国における「遺伝子組換え作物」に関する社会論争について分析・考察した。

これまで日本において、遺伝子組換え作物に対する社会的な合意形成は十分に進んでいるとはいえず、遺伝子組換え作物をめぐるコミュニケーションでは、肯定論・否定論との間で繰り返される「議論の噛み合わなさ」や「ボタンの掛け違い」が繰り返し指摘されている（小島、2016）。このような問題意識に基づき、遺伝子組換え作物において、何の、どのような点から「議論が噛み合わないのか」という論争の背景構造を明らかにするための方法論として、グッドナイトの社会論争分析の枠組みを採用したのである。

分析の結果、①不確実性を伴う知見に対する評価、②社会を運営する主体とその権利に集約できる観点において、対立する意見に対する暗黙の前提への批判が明らかになった。

①の観点は、「食品としての安全性」や「生態系への影響」といった不確実性を伴う知見に対して、どのような暗黙の前提をもってその評価に臨んでいるかということである。否定論では審査の基準の在り方自体に疑問を投げかけ、「国の審査を通過した農作物は安全である」とする肯定論の前提を批判する。一方肯定論では、否定論が暗黙の前提としている「従来の農作物の安全は科学的根拠に基づいてきた」には思い込みに基づく錯覚が介入していることを指摘する。

②の観点は、遺伝子組換え作物を受容する主体とその権利の所在に関する議論である。否定論では、遺伝子組換え作物がどのような技術であろうと、それを受け入れるかどうかの最終決定は消費者にあることを主張する。対して肯定論は、「市民への情報提供は消費者の権利によって保障されるべきである」とする否定論の暗黙の前提が、不安感情を正当化するための詭弁に過ぎないことを批判する。

3. グッドナイト方法論の一般化に向けて

以上のように、遺伝子組換え作物論争では、肯定論・否定論それぞれの暗黙の前提を批判するやり取りが行われている。しかもこの構図は、他の科学・技術と社会の問題に関する論争でも見られるようである。

本発表では、いくつかの事例を取り上げ、グッドナイトの分析手法が広く科学・技術と社会の問題に関する議論の再整理と論争の背景構造を探る一つの方法であることを示していきたい。

註

1) グッドナイトの理論は、このような議論の領域の区分による、各領域間でのコミュニケーション作用の分析手法として成果を上げている。領域間の作用とは、私的領域での議論が拡大することによって、社会的な合意形成に影響を与えることなどである。たとえば、米国のワクチン接種の是非では、専門的領域の見解よりも「家庭内での母親の知識」という私的領域での意見が優先されることがあると指摘されている（Whidden, 2012)。こちらの理論は、いくつかの事例が論文として刊行されており、すでに一般化された理論であるといってよいと思われる。

文献

小島正美（2016)「なぜ、組換え作物は理解されないか〜記者が見たニュースの変遷史」『遺伝 ： 生物の科学』第70巻、第4号、pp.316-319、エヌ・ティー・エス。

鈴木健（2009)「レトリック批評とは何か」鈴木健・岡部朗一編『説得コミュニケーションを学ぶ人のために』（pp.39-82）世界思想社。

Goodnight, G. Thomas. (1982). The Personal, Technical, and Public Spheres of Argument: A Speculative Inquiry into the Art of Public Deliberation. *Journal of the American Forensic Association*, *18*, 214-227.

Olson, M. Kathryn. and Goodnight, G. Thomas. (1994). Entanglements of Consumption, Cruelty Privacy, and Fashion the Social Controversy Over Fur. *Quarterly Journal of Speech*, *80*, 249-276.

Whidden, A. Rachel. (2012). Maternal Expertise, Vaccination Recommendations, and the Complexity of Argument Spheres. *Argumentation and Advocacy*, *48*, 243-257.

Vulnerability in Resistance:

- A Japanese (Former) Hostage's Body as Irony -

Naoki Kambe (Rikkyo University)

Nahoko Takato, a Japanese female aid worker, is one of the hostages taken captive in Iraq in 2004. When Takato and other two civilians returned to Japan after being released, rather than being welcomed with celebration and joy, they became the target of criticism. Takato, in particular, was severely traumatized by the Japanese public and media and her body, in turn, exhibited her fragility, defenselessness, powerlessness, and vulnerability to the entire nation. Although it has passed 14 years since the incident, Takato has never been freed from the trauma but still continues her humanitarian aid work in Iraq. In this paper, I analyze visual and verbal texts of Takato's vulnerable body represented through various articles, photographs, videos, and interviews after the hostage incident in 2004 and argue that her humanitarian aid or mobility is a response or resistance to her own vulnerability, trauma, and marginalization in Japanese society.

To support my argument above, I attend to the following concepts: vulnerability, irony, and mobility. First, I attend to a recent conceptualization of vulnerability. In recent years, an increased critical attention has been paid to the nexus of vulnerability and resistance (e.g., Butler, Gambetti, & Sabsay, 2016; Hagelin, 2013). For instance, Butler et al. (2016) argue that "modes of vulnerability . . . inform modes of resistance" (p. 6). Similarly, Hagelin (2013) argues that a new model of vulnerability is queer, dispersive, and interdependent which "has real potential to change the cultural assumptions about gender" (p. 18). Following these authors, I regard vulnerability as a potentially enabling force which leads to resistance to one's vulnerability, traumas, and marginalization.

Second, I employ postmodern irony elaborated by Linda Hutcheon. Historically, irony has been characterized by incongruity between literal and intended meanings; between what is expected and what occurred (Foss & Littlejohn, 1985). Hutcheon (1992) extends this traditional irony and elaborates deconstructive and constructive functions of irony: while the deconstructive stance "works to distance, undermine, unmask, relativize, destabilize" meanings, the constructive stance "works to assert difference as a positive and does so through double-talking doubled discourses" (p. 30). These functions of postmodern irony can be applied not only to literary and visual arts but to other forms or modes of speech/discourse (e.g., Hutcheon, 1994). Employing these functions, I analyze the nexus of vulnerability and resistance represented through Takato's body.

Finally, I attend to the concept of mobility which is linked to government rule and neoliberalism or techniques of governing through mobility and freedom (e.g., Packer, 2003). The fact that the three civilians went to Iraq in spite of the Japanese government's travel warnings seemed to motivate the harsh public criticism toward them and, as a result, to make them vulnerable citizens. Besides these governing techniques, the concept of mobility carries its own contradictions or gendered characteristics linked to connotations such as progress, adventure, freedom, and liberation as well as those of resistance, deviance,

and shiftlessness (e.g., Cresswell, 2006; Parkins, 2009). In fact, the former set of meanings is linked to masculinity and, in turn, femininity tends to be seen as something static or immobile signifying home or domesticity (Creswell & Uteng, 2008). For this reason, the latter set of meanings is related to the mobility of women which is "always associated with processes of social disruption or change" (Parkins, 2009, p. 3). Given these characteristics, I regard the mobility (e.g., going to Iraq) and immobility (e.g., coming back to her home) of Takato's body as a visual metaphor reflecting (im)proper citizenship and femininity in contemporary Japan.

Employing the recent conceptualization of vulnerability, Hutcheon's postmodern irony, and the concept of mobility carrying neoliberal and gendered connotations, I argue that the deconstructive function of irony or the marginality of Takato's vulnerable body through her mobility destabilizes meanings of "proper" citizenship influenced by neoliberalism whereas the constructive function of irony or the liminality through her "rebirth" in Iraq after the hostage crisis opens multiple spaces for her to perform a new identity with a new meaning of humanitarian action.

References

Butler, J., Gambetti, Z., & Sabsay, L. (2016). Introduction. In J. Butler, Z. Gambetti, & L. Sabsay (Eds.). *Vulnerability in resistance* (pp. 1-11). Durham, NC: Duke Univ. Press.

Cresswell, T. (2006). *On the move: Mobility in the modern western world.* New York: Routledge.

Cresswell, T., & Uteng, T. P. (2008). Gendered mobilities: Toward a holistic understanding. In T. P. Uteng & T. Cresswell (Eds.). *Gendered mobilities* (pp. 1-12). Oxon: Routledge.

Foss, S. K., & Littlejohn, S. W. (1985). The Day After: Rhetorical vision in an ironic frame. In K. Foss (Ed.). *Rhetorical criticism: Exploration & practice* (pp.312-334). Prospect Heights, IL: Waveland Press.

Hagelin, S. (2013). *Reel vulnerability: Power, pain, and gender in contemporary American film and television.* New Brunswick, NJ: Rutgers Univ. Press.

Hutcheon, L. (1992). Appendix I 'Speaking Canadian': The ironies of Canadian art and literature. In L. Hutcheon (Ed.). *Double-talking* (pp. 29-31). Toronto: ECW Press.

Hutcheon, L. (1994). *Irony's edge: The theory and politics of irony.* Oxon: Routledge.

Packer, J. (2003). Disciplining mobility: Governing and safety. In. J. Z. Bratich, J. Packer, & C. McCarthy *Foucault, cultural studies, and governmentality* (pp. 135-161). New York: SUNY Press.

Parkins, W. (2009). *Mobility and modernity in women's novels, 1850s-1930s: Women moving dangerously.* Hampshire: Palgrave Macmillan.

第 48 回年次大会実行委員会　Annual Convention Committee

大会実行委員長　Program Chair

長谷川　聡	（北海道医療大学）	Satoshi Hasegawa	(Health Sciences Univ. of Hokkaido)

大会実行委員　Program Committee Members

目時光紀	（天使大学）	Mitsutada Metoki	(Tenshi College)
平野啓介	（旭川大学）	Keisuke Hirano	(Asahikawa University)
織田なおみ	（札幌医学技術福祉歯科専門学校）	Naomi Oda	(Sapporo Medical Technology, Welfare and Dentistry Professional Training College)
足利俊彦	（北海道医療大学）	Toshihiko Ashikaga	(Health Sciences Univ. of Hokkaido)
伊藤明美	（藤女子大学）	Akemi Ito	(Fuji Women's University)
北間砂織	（藤女子大学）	Saori Kitama	(Fuji Women's University)
佐々木智之	（北海道科学大学）	Tomoyuki Sasaki	(Hokkaido University of Science)
竹内康二	（札幌国際大学）	Koji Takeuchi	(Sapporo International University)
塚越博史	（北海道医療大学）	Hiroshi Tsukakoshi	(Health Sciences Univ. of Hokkaido)
水島梨紗	（札幌学院大学）	Lisa Mizushima	(Sapporo Gakuin University)
山田晃子	（藤女子大学）	Koko Yamada	(Fuji Women's University)

オンライン受付及び大会運営サポート：

実行委員（JCA）　JCA Committee Members

①大会プログラム・学術局関連　Convention Program

責任者	守崎　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
	高井　次郎	（名古屋大学）	Jiro Takai	(Nagoya Univ.)
	野中　アンディ	（株式会社コムスキル）	Andy Nonaka	(Comm Skill Co., Ltd.)
	森泉　哲	（南山大学）	Satoshi Moriizumi	(Nanzan Univ.)

②大会プログラム・発表査読者　Review Committee

守崎　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
坂井　二郎	（東京福祉大学）	Jiro Sakai	(Tokyo Univ. of Social Welfare)
高井　次郎	（名古屋大学）	Jiro Takai	(Nagoya Univ.)
野中　アンディ	（株式会社コムスキル）	Andy Nonaka	(CommSkill Co., Ltd.)
森泉　哲	（南山大学）	Satoshi Moriizumi	(Nanzan Univ.)

③受付・事務局関連　Registration

責任者	高永　茂	（広島大学）	Shigeru Takanaga	(Hiroshima Univ.)
	菅家　知洋	（東海大学）	Tomohiro Kanke	(Tokai Univ.)
	松島　綾	（立命館大学）	Aya Matsushima	(Ritsumeikan Univ.)

④大会広報関連　Advertisement

責任者	小山　哲春	（京都ノートルダム女子大学）	Tetsuharu Koyama	(Kyoto Notre Dame Univ.)
	田島　慎朗	（神田外語大学）	Noriaki Tajima	(Kanda Univ. of International Studies)
	今井　達也	（南山大学）	Tatsuya Imai	(Nanzan Univ.)

コミュニケーション学会　会長及び本部（学会事務局）President and Office of JCA

会 長　President　五島　幸一　（愛知淑徳大学）　Koichi Goshima (Aichi Shukutoku U.)

学会事務局　JCA Office：

〒739-8522
東広島市鏡山 1-2-3
広島大学大学院文学研究科
高永　茂（高永研究室）
日本コミュニケーション学会事務局
Phone:　082-424-6665
E-mail: cajoffice@caj1971.com

Graduate School of Letters
Hiroshima University
1-2-3 Kagamiyama, Higashihiroshima, 739-8522 Japan
The Office of Japan Communication Association
Phone: 082-424-6665

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先：
For inquiries regarding membership, dues, and publications:

国際文献社
アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会ヘルプデスク
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5

International Academic Publishing Co., Ltd.
Academy Center
Japan Communication Association Help Desk
358-5 Yamabuki-cho Shinjuku-ku
Tokyo, 162-0801

Phone：03-3362-9741 FAX：03-3368-2827
E-mail: jcom-desk@bunken.co.jp

くろしお出版

社会志向の言語学
豊富な実例と実証研究から学ぶ

■南雅彦［著］　本体1,800円＋税

なぜ言葉は変化するのか？　言語と社会要因との関わり、変化が起こる原因とメカニズムを解き明かす。言語学入門に最適。

新版　推論と照応

■山梨正明［著］　本体2,700円＋税

92年に刊行され再版が待ち望まれていた『推論と照応』が15年ぶりに復刊。認知言語学に関わる新論考も加え、充実の内容に。

参加型文化の時代におけるメディア・リテラシー
言葉・映像・文化の学習

■アンドリュー・バーン［著］　奥泉香　［編訳］
石田喜美ほか［訳］　2,700円＋税

学校教育の現場でデジタルメディアをどう扱い、どう教育すべきか。実践の分析を通じた提案。

日本語教育に役立つ心理学入門

■小林明子/福田倫子/向山陽子/鈴木伸子［著］
本体1,800円＋税

日本語教育に関わる心理学的な知識を学べる入門書。日本語を教えるとき、学習者の考え方や行動を理解したり悩みを聞いたりするときに役立つ。

認知日本語学講座第5巻
認知語用論

■小山哲春・甲田直美・山本雅子［著］
本体3,700円＋税

日本語のコミュニケーションを認知言語学から問いかける。日本コミュニケーション学会・学会賞受賞（書籍の部）。

習ったはずなのに使えない文法

■江田すみれ/堀恵子［編］　本体2,500円＋税

「習ったはずなのに使えない」文法項目の研究論集。砂川有里子・太田陽子・高梨信乃ほか。

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-21-10　Tel 03-5684-3389　Fax 03-5684-4762　Mail kurosio@9640.jp　**http://www.9640.jp**

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111　〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095　http://www.nakanishiya.co.jp/〔表示は税抜価格〕

大学生からのグループ・ディスカッション入門
中野美香 著
グループ・ディスカッションのスキルを具体的に高めるワーク。1900円

大学における海外体験学習への挑戦
子島 進・藤原孝章 編
「事例編」と「マネージメントと評価編」を通してよりよい実践へ。2800円

出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ
田中東子・山本敦久・安藤丈将 編
文化と権力の関係を捉えるための議論や視座を学ぶ。2500円

メディア・コンテンツ論
岡本 健・遠藤英樹 編
アニメ制作や著作権、同人文化など、現代社会に遍在し氾濫するメディア・コンテンツを、理論的、実務的視点から多角的に読み解く。2500円

基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法
高梨克也 著
様々な会話コミュニケーションを理論的・体系的に分析するために。2400円

コミュニケーション研究法
末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子編
研究倫理などの心構えから、フィールドワークや実験法、質問紙法、統計まで、コミュニケーション研究に必須の多彩な手法を解説。3200円

大学初年次における日本語教育の実践
◎大学における学習支援への挑戦3
仲道雅輝・山下由美子・湯川治敏・小松川浩編
全学的日本語教育の実践集。2300円

大学における多文化体験学習への挑戦
◎国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する　村田晶子 編著
教育デザインと学びの意義。2900円

交錯する多文化社会
◎異文化コミュニケーションを捉え直す
河合優子 編
日常の中の複雑なコンフリクトを、インタビューやフィールドワーク、メディア分析を通じて読み解く。2600円

文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がりと軌跡
◎研究から実践まで
中井陽子 編著
発展・変遷と展開を整理。2800円

リフレクティング
◎会話についての会話という方法
矢原隆行 著
じっくり聞き、考え、相手に返す、会話による新たなコミュニケーション空間の創出方法を開拓。2000円

コミュニケーション支援のフィールドワーク
◎神経難病者への文化心理学的アプローチ
日髙友郎 著　難病者が充実した生を営むための支援とは。6700円

相互行為における指示表現

須賀あゆみ著　定価6400円＋税

「ものすごい大嵐」「台風みたいなの」「カトリーナ」。同じものを指すときでも、性質を説明したり、固有名詞を用いたり、表現方法は多様である。本書は、会話分析を用いて、日常会話での指示表現の選択の仕組みを明らかにする。

真田信治著作選集 シリーズ日本語の動態〈全4巻〉

第1巻　標準語史と方言

真田信治著　定価1800円＋税

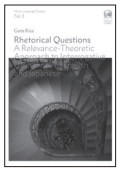
近代日本語における標準語の成立過程やそれをめぐる地域社会の葛藤などに焦点を当てた選りすぐりの論稿15本。著者の長年の研究から日本語の動態をみつめる。シリーズ第1巻。

Rhetorical Questions

A Relevance-Theoretic Approach to Interrogative Utterances in English and Japanese

後藤リサ著　定価10000円＋税

日英語の修辞疑問文の発話解釈の仕組みを関連性理論の枠組みで探究。典型的な反語タイプ以外の非典型例も分析対象とし、包括的な修辞性の認知メカニズムを解明。



多人数会話におけるジェスチャーの同期　「同じ」を目指そうとするやりとりの会話分析

城綾実著　定価5800円＋税

二人以上で同時に同じジェスチャーを行う場面を対象とし、「同じ」を目指すやり方に迫る。身体と言語、身体と言語の相互彫琢を支える人びとの合理性と柔軟さを明らかにする。

関西弁事典

真田信治監修　定価6200円＋税

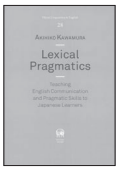
関西弁を対象にしたエッセイや社交用語ガイドの類は他方言に比べて圧倒的に多い。しかしながら、その全容を示す総合的な解説書、また本格的な「事典」はいまだ存在していない。平易な説明で関西弁の全容を知る史上初の事典。

Lexical Pragmatics

Teaching English Communication and Pragmatic Skills to Japanese Learners

川村晶彦著　定価11000円＋税

英語コミュニケーション能力をいかに育てるか。語用論・ポライトネス（待遇表現）からの知見に基づく、日本人学習者のための新しいコミュニケーション教育理論を提唱する。



話しことばへのアプローチ

創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦

鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編

定価2700円＋税

書きことばに基づく理論では説明できない「話しことば」の諸現象が注目を集めている。書きことばへの偏向から脱却し、言語研究を新しくする1冊。

限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究

定延利之編　定価8800円＋税

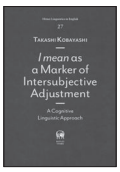
これまで8年間行われてきた「面白い話」動画コンテストのデータを、音声科学・文法研究・文化論といった様々な視点で分析する論文集。これからの談話研究のための一里塚。

I mean as a Marker of Intersubjective Adjustment

A Cognitive Linguistic Approach

小林隆著　定価8500円＋税

談話標識 I mean の本質と用法の広がりを、認知言語学における「現行談話スペース（Current Discourse Space）」の概念を用いて明らかにする。



ひつじ書房

■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信しております。ご希望の方は下記アドレスまでメールでご連絡ください。
〒112-0011　東京都文京区千石2-1-2大和ビル2F　株式会社ひつじ書房
TEL 03-5319-4916　FAX 03-5319-4917　toiawase@hituzi.co.jp　http://www.hituzi.co.jp/

英語で学ぶ社会心理学

大坪庸介，アダム・スミス著

有斐閣ブックス　本体2,400円+税

左頁に英文，右頁に日本語でキー概念や英語特有の表現など，いきなり海外の文献を読む事に抵抗のある人向けに，助けになる情報をコンパクトに解説。

援助関係論入門　「人と人との」関係性

稲沢公一著

有斐閣アルマ　本体1,900円+税

「困っている人に手を差しのべる」という素朴なイメージから，高度に専門的な援助まで。幅広い意味をもつ「対人援助」にまつわる基礎理論をやさしく解説する入門テキスト。

社会学入門　社会とのかかわり方

筒井淳也・前田泰樹著

有斐閣ストゥディア　本体1,900円+税

「出生」「労働」「老い」といった誰もが体験しうる「人生のイベント」について，計量手法と質的研究という対照的な方法論者がその考え方を示し，社会学的に考える道筋を立体的に描きだす。

行動分析学　行動の科学的理解をめざして

坂上貴之・井上雅彦著

有斐閣アルマ　本体2,100円+税

行動の分析を一つの軸に，基礎理論と臨床・日常場面への応用をリンクさせる一冊。演習問題や事例紹介など，充実のツールで学びをサポート。医療福祉の現場に立つ方にもおすすめ。

ファッションで社会学する

藤田結子・成実弘至・辻　泉編

四六判　本体2,300円+税

実生活に身近な「ファッション」を考えることを通して，社会学を学ぶ，野心的な入門テキスト。オーソドクスな社会学的思考にアプローチする，ファッション「で」学ぶ社会学。

戦後社会保障の証言

厚生官僚120時間オーラルヒストリー

菅沼　隆・土田武史・岩永理恵・田中聡一郎編

A5判　本体5,600円+税

社会保障制度の成立と展開に関する重要なトピックについて，厚生省の官僚にインタビューを行い，その証言を収録・解説。

コミュニケーション論をつかむ

辻　大介・是永　論・関谷直也

テキストブックス［つかむ］　本体2,000円+税

コミュニケーションとはいったいどういう営みであるのか。身近な事例を切り口に，社会学，心理学，言語学など様々な研究の知見を盛り込んで複眼的な視点から読み解く入門書。

はじめて学ぶ 異文化コミュニケーション

多文化共生と平和構築に向けて

石井　敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人著

有斐閣選書　本体2,000円+税

多文化社会に生きる現代の学生・社会人にとって必要な，異文化コミュニケーションの知識と考え方を提供する。

有斐閣出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/
（表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。）

◉図書目録送呈◉

シリーズ 認知言語学入門 全6巻

池上嘉彦・河上誓作・山梨正明[監修]

新しい言語観を背景に、数々の興味深い成果をあげる認知言語学の、はじめての入門シリーズ。

第1巻 認知言語学への招待 辻 幸夫[編]

■目次■ 認知言語学:“紹介”のことば(池上嘉彦)／認知言語学の輪郭(辻 幸夫)／認知言語学の史的・理論的背景(野村益寛)／認知言語学の基本的な考え方(本多 啓)／概念形成と比喩的思考(菅井三実)／認知から見た言語の構造と機能(塩谷英一郎)／認知言語学の周辺領域(森 芳樹)

◉A5判・304頁 **定価＝本体2,300円＋税**

第2巻 認知音韻・形態論 吉村公宏[編]

■目次■ 認知音韻論(熊代文子)／認知形態論(黒田 航)／認知音韻・形態論とコネクショニズム(出口雅也)／認知語彙論(吉村公宏)／認知語彙論と構文の習得(児玉一宏)

◉A5判・312頁 **定価＝本体2,400円＋税**

第3巻 認知意味論 松本 曜[編]

■目次■ 認知意味論とは何か(松本 曜)／語の意味(松本 曜)／意味の拡張(籾山洋介・深田 智)／多義性(籾山洋介・深田 智)／メタファー表現の意味と概念化(高尾享幸)／意味の普遍性と相対性(井上京子)

◉A5判・336頁 **定価＝本体2,400円＋税**

第4巻 認知文法論Ⅰ 西村義樹[編]

最新刊!

■目次■ 認知言語学の文法研究(西村義樹)／名詞の認知文法論(早瀬尚子)／文法の中の換喩(西村義樹)／認知文法と格(熊代敏行)／モノとコトの認知文法論(小早川 暁)／英語の程度比較・程度修飾表現の認知文法(友澤宏隆)

◉A5判・296頁 **定価＝本体2,400円＋税**

第5巻 認知文法論Ⅱ 中村芳久[編]

■目次■ 主観性の言語学(中村芳久)／行為連鎖と構文Ⅰ(谷口一美)／行為連鎖と構文Ⅱ(都築雅子)／行為連鎖と構文Ⅲ(中村芳久)／他動性と構文Ⅰ(中村 渉)／他動性と構文Ⅱ(坪井栄治郎)／談話と認知(堀江 薫)

◉A5判・316頁 **定価＝本体2,300円＋税**

第6巻 認知コミュニケーション論 大堀壽夫[編]

■目次■ 認知とコミュニケーション(大堀壽夫)／指示語の理解(高橋英光)／相・時制・法(樋口万里子)／節を越えて(樋口万里子・大橋 浩)／レトリックの語用論(大森文子)／認知・談話・レトリック(大森文子)／ディスコースの文化の意味(松木啓子)／物語の構造と発達(大堀壽夫)

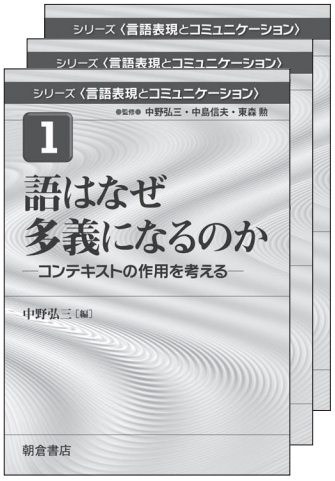
◉A5判・312頁 **定価＝本体2,400円＋税**

大修館書店 ご注文は▶☎03-3868-2651(販売部) https://www.taishukan.co.jp

◎コミュニケーションのありように言語学から迫る

シリーズ〈言語表現とコミュニケーション〉全3巻

各A5判　各本体3,200円



①語はなぜ多義になるのか
—コンテキストの作用を考える—

中野弘三 編 200 頁 (51621-0)

Ⅰ部　基礎編：多義性の基本的問題
Ⅱ部　実践編：多義語分析の実践
　語彙意味論的アプローチ／認知意味論的アプローチ／分析と語用論
Ⅲ部　応用編：意味変化の要因を探る
　語義の歴史的変化／借入語

②対話表現はなぜ必要なのか
—最新の理論で考える—

東森　勲 編 180 頁 (51622-7)

Ⅰ部　基礎編：対話表現の基本的問題
　法表現／婉曲表現／談話標識／配慮表現
Ⅱ部　応用編：対話表現はいかに変化したか
　—英語史的変化と日本語若者言葉

③発話の解釈はなぜ多様なのか —コミュニケーション能力の働きを考える—

中島信夫 編 184 頁 (51623-4)

Ⅰ部　基礎編：発話の語用論的解析と理解
　コミュニケ—ションの諸相／推論／選択と解釈／ポライトネス
Ⅱ部　発展編：発話解釈のテーマ別探究と考察
　重層的な発話行為／否認／アイロニー／ジョーク

◎日本語関連書

◎AIは恋の歌を歌えるか

Jポップの日本語研究
—創作型人工知能のために—

伊藤雅光 著
A5 判 200 頁 本体 3,200 円 (51054-6)

Jポップの歌詞を「ことば」として計量的に分析し，その変遷や様々な特徴を明らかにする。その成果をもとに人工知能にラブソングを作らせることを試みる。

◎今のことばをたのしむ

俗語入門
—俗語はおもしろい！—

米川明彦 著
A5 判 192 頁 本体 2,500 円 (51053-9)

改まった場では使ってはいけない，軽く，粗く，汚く，ときに品がなく，それでいてリズミカルで流行もする話しことば＝俗語，楽しい実例とともにわかりやすく解説。

◎ことばの新しい見方

データで学ぶ日本語学入門

計量国語学会 監修
A5 判 168 頁 本体 2,600 円 (51050-8)

「計る」日本語学入門。いまや現象を数量的に考えるのはあたりまえ。日本語も，まずは数えてみよう。ことばをデータに置き換えるのは決して難しくないことを解説。

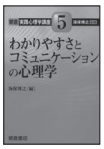
敬語コミュニケーション
（日本語ライブラリー）

蒲谷宏 編著
A5 判 180 頁 本体 2,500 円 (51521-3)

敬語を使って表現し，使われた敬語を理解するために。仕組みや役割・表現者の位置付けなどを解説。コミュニケーションの全体を的確に把握し，様々な状況に対応する１冊。

わかりやすさとコミュニケーションの心理学
（朝倉実践心理学講座５）

海保博之 編
A5 判 192 頁 本体 3,400 円 (52685-1)



現代社会のコミュニケーションに求められている「わかりやすさ」について，その心理学的基礎を解説し，文書から電子メディアまで具体的な実践技法を紹介する。

ことばのおもしろ事典

中島平三 編
B5 判 324 頁 本体 7,400 円 (51047-8)

ことわざや広告，手話といった身近にある“ことば”のおもしろさや不思議さから，多彩で深いことば・言語学の世界へと招待する全30章。

朝倉書店
〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29
電話　営業部（03）3260-7631　FAX（03）3260-0180
http://www.asakura.co.jp

（ISBN）は 978-4-254- を省略
価格は税抜本体

ACCESS MAP

札幌市中央区南5条西11丁目1289-5

TEL 011-513-2111